北田遺跡

平成16・17年度介護老人保健施設「わかな」及び認知症対応型共同生活介護「わかな」建設工事に伴う埋蔵文化財第2次緊急発掘調査報告書

2006年

社会福祉法人　平　成　会
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

北　田　遺　跡

平成16・17年度介護老人保健施設「わかな」及び認知症対応型共同生活介護「わかな」建設工事に伴う埋蔵文化財第２次緊急発掘調査報告書

２００６年

社会福祉法人　平　成　会

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

１号住居址全景

１号住居址カマド

序

箕輪町は、諏訪湖の南、伊那谷の北部に位置し、東西には南北に連なる山々が望め、それらから流れ出す中小河川の清らかな水は、やがて諏訪湖を源流とする天竜川にそそがれ、山紫水明が織り成す自然豊かな美しい郷土であります。この地の生み出す自然の恵みを求め、数万年も古くから人々が暮らし始め、幾年もの時を重ねる中でその時代時代に生きた先人達の努力により、今日の町の発展へと繋がってきました。町にはまだ、彼らが残した歴史と文化を今に伝える多くの文化遺産が眠っています。それが埋蔵文化財であります。

町の北東に位置する南小河内区は、今回調査を行った北田遺跡のほか、縄文時代から近世に渡る多くの遺跡が密集するところであります。特に、当地の南東部にある県史跡「上ノ平城跡」は、県内でも数少ない古式の城として知られ、地域のシンボル的な場として今も大切に地元住民の協力により保護されています。城は、後の室町から戦国時代に再度構築されて地域の拠点となり、今の町並みが造られたと思われますが、発掘調査においてもその時代の遺構が確認されています。

町教育委員会が実施した本遺跡の緊急発掘調査としては、今回で二度目となりましたが、少しずつではありますが、地域の歴史解明に繋がる貴重な成果を上げてきています。今回の成果につきましては、本書の中で詳細に記してありますので、これを広く活用していただき、これからの地域の発展の一助となれば幸いであります。

今回の記録保存事業が行えましたのは、社会福祉法人平成会様の郷土の文化財保護に対しますご理解と多大なるご協力の賜物であります。地域の歴史と文化を伝えるとともに、施設の建設はこれから新しい歴史を築いていく礎になることを切に願うものであります。また、本書の刊行をもちまして、改めて感謝の意を表するものであります。なお、各方面でご指導ご助言をいただいた諸機関の方々や、またご協力いただきました区と調査関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会
教育長　小　林　通　昭

例　　言

1　本書は、平成16・17年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町東箕輪3,296番地１他に所在する、北田遺跡第２次の緊急発掘調査報告書である。

2　遺跡の発掘調査及び整理作業等の業務は、社会福祉法人「平成会」より委託を受けて、箕輪町教育委員会が実施した。

3　本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記－大串久子、金澤　蘭、春日誠子、後藤主計

遺構図の整理・トレース－大串久子、白鳥弘子、根橋とし子

遺物の実測・拓本・トレース－大串久子、小木曽俊一、白鳥弘子、根橋とし子、向山英人

挿図作成－大串久子、小木曽俊一、白鳥弘子、根橋とし子

写真撮影・図版作成－赤松　茂、大串久子、白鳥弘子、根橋とし子

4　本書の執筆は、赤松　茂、根橋とし子が行った。

5　本書の編集は、赤松　茂、大串久子、白鳥弘子、根橋とし子が行った。

6　出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。

7　調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

個人－大槻高章、片桐圓祐、片桐幹夫、金澤阿砢、倉田千秋、小林彬人、柴　清己、柴　文弘

機関－㈶長野県埋蔵文化財センター、南小河内区、箕輪町国保東部診療所

凡　　例

1　挿図

・挿図の縮尺は、各図ごとの右下に表記（スケールを有するものも含む）した。

・遺物実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。

土器実測図－１：４　土器拓影図－１：３　金属器実測図－１：２　石器実測図－１：３

・土器実測図の土器断面の接合状況は、観察できるもののみ表示している。

・土器実測図の土器断面のスクリーントーンによる表示は、以下のものを表している。

…須恵器　…陶器　…磁器

・遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表している。

…礫断面　…焼土　●…土器　□…炭化物

・上記以外の表記については、各図ごとに凡例を設けているので参照されたい。

2　土層及び遺物観察

・土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。

・出土土器観察表の法量は、上から「口径・底径・器高」の順に記し、単位はセンチメートル(㎝)である。また、現存する数値は「(　)」、推定値は「〈　〉」、計測不能は「－」で表している。

・出土金属器観察表の重量の単位は、グラム(g)で表している。法量はすべて最大値である。また、現存する数値は「(　)」、推定値は「〈　〉」、計測不能は「－」で表している。

3　写真図版

・各写真の数字は、挿図における遺物番号を表している。

本　文　目　次

巻頭カラー図版
序　例言　凡例
本文目次

第Ⅰ章　発掘調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査概要と体制 …… 2
第３節　調査日誌 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 4
　第１節　地形と地質 …… 4
　第２節　歴史環境 …… 5
第Ⅲ章　調査結果 …… 9
　第１節　調査の方法と結果概要 …… 9
　第２節　土層堆積状況 …… 9
第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　検出遺構 …… 13
　　1　竪穴住居址 …… 13
　　2　土坑 …… 15
　　3　竪穴建物址 …… 17
　　4　溝状遺構 …… 19
　　5　竪穴状遺構 …… 20
　第２節　試掘調査の結果 …… 25
　第３節　遺構外出土遺物 …… 28
第Ⅴ章　総括 …… 29

図　版
報告書抄録

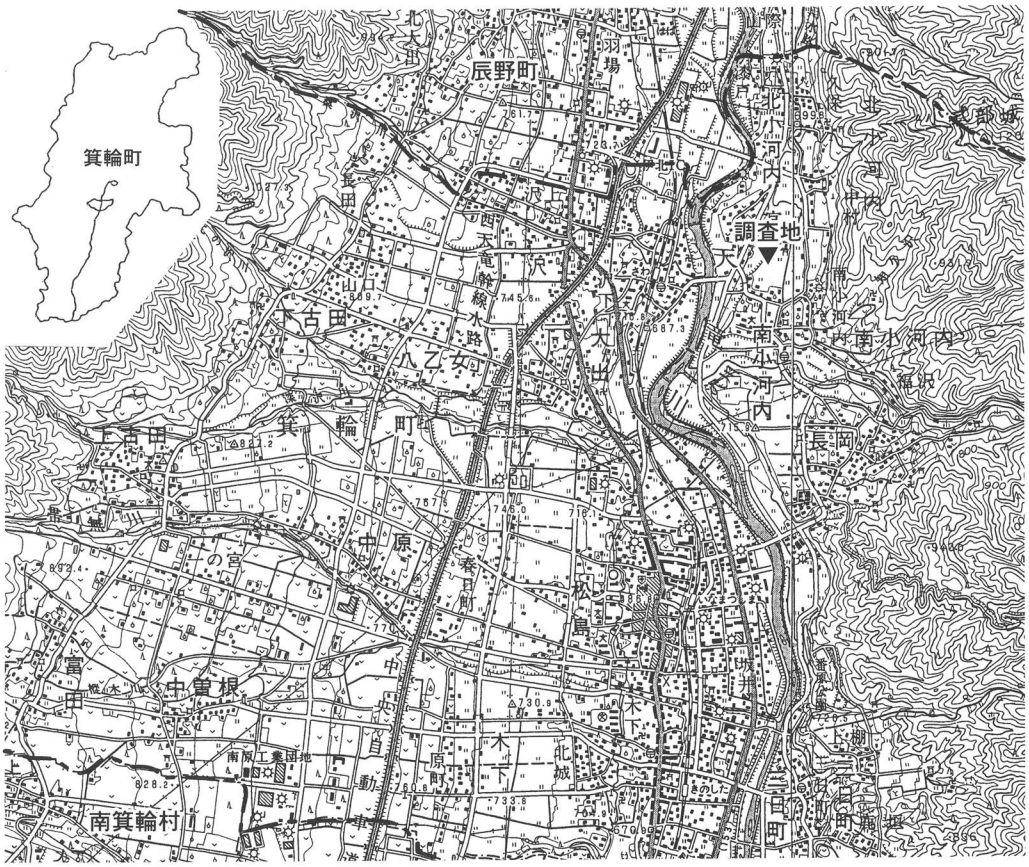
第Ⅰ章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経過

北田遺跡は、箕輪町南小河内区に位置し、東方の山麓から流れる沢川によって形成された扇状地の北部に所在する。遺跡地からは眺望もよく、南方に仙丈岳、北東に守屋山が望め、西方には天竜川を挟み沢区の市街地が展望できる。遺跡地は、県道19号線等の主要道路の沿線には宅地が建ち並ぶが、ほとんどの土地利用としては水田及び畑等の耕作地である。

北田遺跡では、過去平成４年度に箕輪町国民健康保険東部診療所の移転建築工事に先立つ第１次調査が遺跡の南部で実施されている。この調査では、縄文時代を主とした土坑12基が検出され、町内で初の落とし穴土坑が確認されている。

今回、社会福祉法人平成会が遺跡北部の耕作地一帯を用地として、介護老人保健施設と認知症対応型共同生活介護施設の建設計画が、平成15年８月に町と南小河内区及び用地地権者に提示された。その際、用地が表記遺跡の包蔵地に当ることから、その保護処置について同法人と町教育委員会との間で再三協議を重ねてきた。同年11月に県教育委員会を交えて実施した３者間での保護協議の結果、用地の中で施



第１図　調査地位置図（１：50,000）

設の建設により係る文化財の破壊が余儀なくされる個所は発掘調査による記録保存を行うことになった。また、調査に係る費用負担は同法人の全面的な協力が得られ、業務は町教育委員会に委託することを合意した。 教育委員会はこれを受けて、平成16年度は現地調査と一部整理作業を、平成18年度は整理作業及び報告書作成業務を実施し、本書の刊行に至った。

第２節　調査概要と体制

１　遺　跡　名　　北田（きただ）遺跡

２　所　在　地　　長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪3,296番地１他

３　事業期間　　平成16年６月１日～17年３月25日

（発掘調査　同年６月７日～12月21日）

（整理作業　同年12月22日～17年３月25日）

平成17年４月１日～18年３月24日（整理作業）

４　事　務　局

教　育　長　　小林　通昭

生涯学習課長　　藤原　　久（平成16年４月１日～９月30日）

平井　克則（平成16年10月１日～）

文化財係長　　鳥山　久夫（平成16年４月１日～17年３月31日）

同　主　幹　　赤松　　茂

同　主　幹　　有賀　一治

同副主幹　　柴　　秀毅（平成17年４月１日～）

臨時職員　　中村　孝子（平成17年９月30日まで）

５　調　査　団

調査団長　　小林　通昭

調査副団長　　藤原　　久（平成16年４月１日～９月30日）

平井　克則（平成16年10月１日～）

調査担当者　　赤松　　茂

調　査　員　　金澤　　蘭（平成16年４月１日～17年３月31日）

根橋とし子

調査団員　　有賀多恵子、泉沢徳三郎、大串　　進、大串　久子(整理作業)、岡田　和弘、岡田　照子、小川　陽三、小木曽俊一(整理作業)、春日　誠子、唐澤　清光、小松　峰人、後藤　主計、白鳥　弘子(整理作業)、征矢　三郎、田中　忠男、中坪　恵子、中村　孝子、藤沢　具明、藤沢　達雄、堀　五百治、堀内　昭三、松崎　仲子、向山　英人、山崎　朝男、横内　紀八、吉川　正剛

（※50音順）

第３節　調査日誌

６月15日(火)　第１調査区を重機による表土剥ぎを行う。ハウスとトイレを設置し、機材を搬入する。住居址１軒を確認する。

６月16日(水)　住居址のプランを確認する。第２・３調査区の表土剥ぎを行う。

６月17日(木)　本日より作業員を動員しての作業を開始。第１調査区の上面確認に入る。

６月18日(金)　重機にて第３調査区の表土剥ぎ。第２・３調査区の上面確認。第３調査区の北部では、農業基盤整備事業による埋め土の状況を確認。

６月22日(火)　重機による第３調査区の表土剥ぎのみ実施。

６月23日(水)　第１・３調査区の上面確認。第３調査区で土坑３基確認される。第２調査区にサブトレンチ設定し手掘りで掘削。

６月24日(木)　１号竪穴状遺構の掘り下げ。陶・磁器が多量に出土する。第３調査区で１号竪穴建物址を確認する。第３調査区北部に１トレンチを設定し重機で掘削。文化財保護審議会委員が視察に訪れる。

６月29日(火)　１号住居址、１号竪穴状遺構、１号竪穴建物址の掘り下げ継続。

６月30日(水)　１号住居址の掘り下げとベルト断面の分層。１号竪穴建物址の床面より陶器片が出土。

７月１日(木)　１号住居址の土層断面測量と掘り下げ。第３調査区の１トレンチの土層断面測量。

７月２日(金)　１号住居址の土層観察と写真撮影の後ベルト外し。１号竪穴建物址のベルトを外し平面測量を行う。２～４号土坑の断面測量及び写真撮影後、全掘削を行う。

７月５日(月)　１号竪穴建物址の拡張部、２～４号土坑の平面測量と写真撮影。１号竪穴状遺構の土層断面写真撮影と測量。

７月７日(水)　１トレンチの平面測量とレベル入れ。１号竪穴状遺構のレベル入れ、１号溝状遺構の土層断面測量。１号住居址カマドの掘り下げ。

７月８(木)・９日(金)　１号住居址カマドの掘り下げ。

７月14日(水)　１号住居址カマドの掘り下げ。写真撮影と土層断面測量。

７月15日(木)　１号住居址カマドの写真撮影と平面測量。

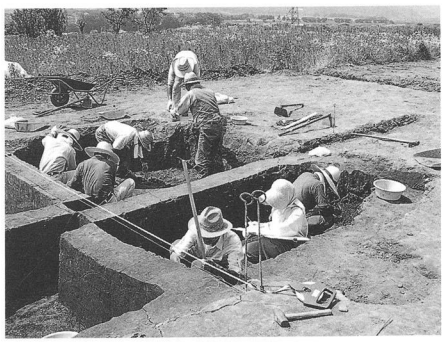
７月16日(金)　１号住居址の全体写真撮影。

７月20日(火)　１号住居址平面測量。

７月21日(水)　１号住居址平面測量。カマドの写真撮影。

８月２日(月)　試掘調査区の草刈を行う。

８月３日(火)～８月５日(木)　試掘調査区に９本のトレンチを掘削し、トレンチ内の遺構上面確認作業、写真撮影・断面・平面測量を行う。



８月６日(金)　機材を整理し調査を終了する。

12月７日(火)　補足調査を行う。

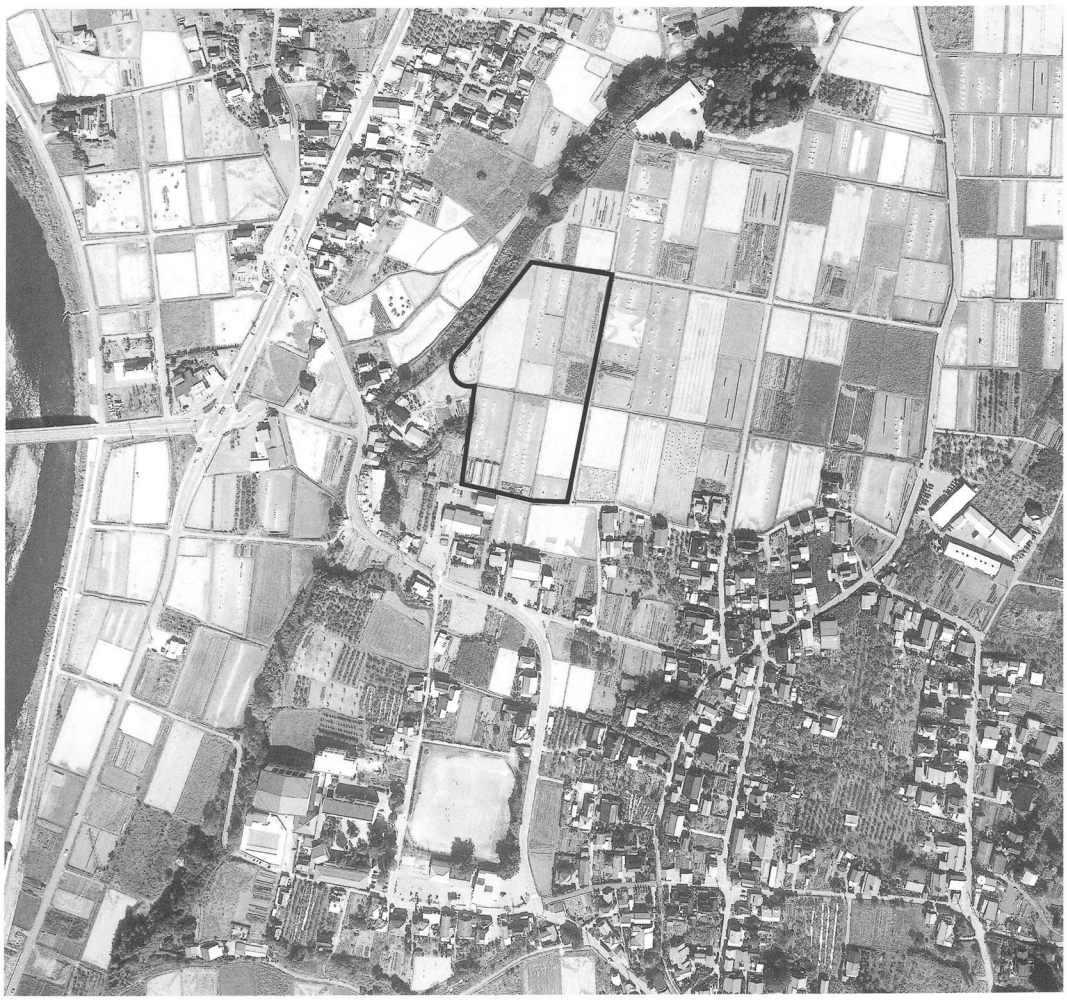
第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスにはさまれた、南北70㎞にも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。箕輪町を含む伊那盆地は、天竜川の低地帯から両アルプスの山頂に至って、大起伏地形となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10㎞幅にそれが集中する、きわめて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

以前は、伊那谷の特徴を表すとして注目されていた段丘状の地形が配列している様子は、天竜川の侵食による河岸段丘と考えられていたが、現在はそれが中央・南両アルプスの上昇に伴う地殻変動の結果、断層によって造り出された断層崖である、ということが研究によってわかってきた。各地でこうした断層の調査が行われ、伊那谷の地形の歴史は以前より詳しく把握されつつある。そのようなことから今後



上空より遺跡地を望む（１：8,000　平成12年撮影）

箕輪町においても、さらに詳しい調査が望まれるところである。

北田遺跡が所在する南小河内区は、天竜川の東側にあたりいわゆる「竜東」とよばれる。箕輪町では、複合扇状地によって形成された広大で、平坦な地形が続く竜西側に比べ、竜東側は、小規模の山が近くにせまり変化に富んだ地形となっており、比較的平坦地が狭く緩傾斜が続いている。基本的に一帯の地形を造り出している要因としては、南部は沢川及び知久沢川、北部は北小河内区を含む東部山麓から流れ出す中小河川の押し出しにより形成された複合扇状地である。現在では、耕作や造成に伴いわかりにくいが、以前は、うねりをもちながら西方へ緩やかに傾斜する、というこの扇状地の特徴がもっと明瞭に現われていたと思われる。そして、遺跡の位置する場所はこの複合扇状地の扇端部にあたるため、この地より天竜川を始め、遠方までを見渡せる絶好の場所であったと思われる。

地質において竜西側は複合扇状地の形成に伴い、広く扇状地の堆積物で覆われている。それに対し竜東側では、花崗岩や粘板岩などを中心とし、領家変成岩からなる結晶質石灰岩や石英玢岩が分布するなど、変化に富んだ地質になっている。また伊那谷を覆っている被覆層は竜西側では厚く、基盤岩の露出は少ないのに比べ、竜東側の被覆層は比較的浅く、断片的である。そのため、天竜川の支流の谷沿いには基盤岩が露出し、天竜川の合流点まで続いている。

引用参考文献

伊那市教育委員会・上伊那地方事務所　小黒南原・伊勢並遺跡　緊急発掘調査報告書　1992.3

松島信幸　伊那谷の造地形史　伊那谷の活断層と第四期地質　1995.3.31

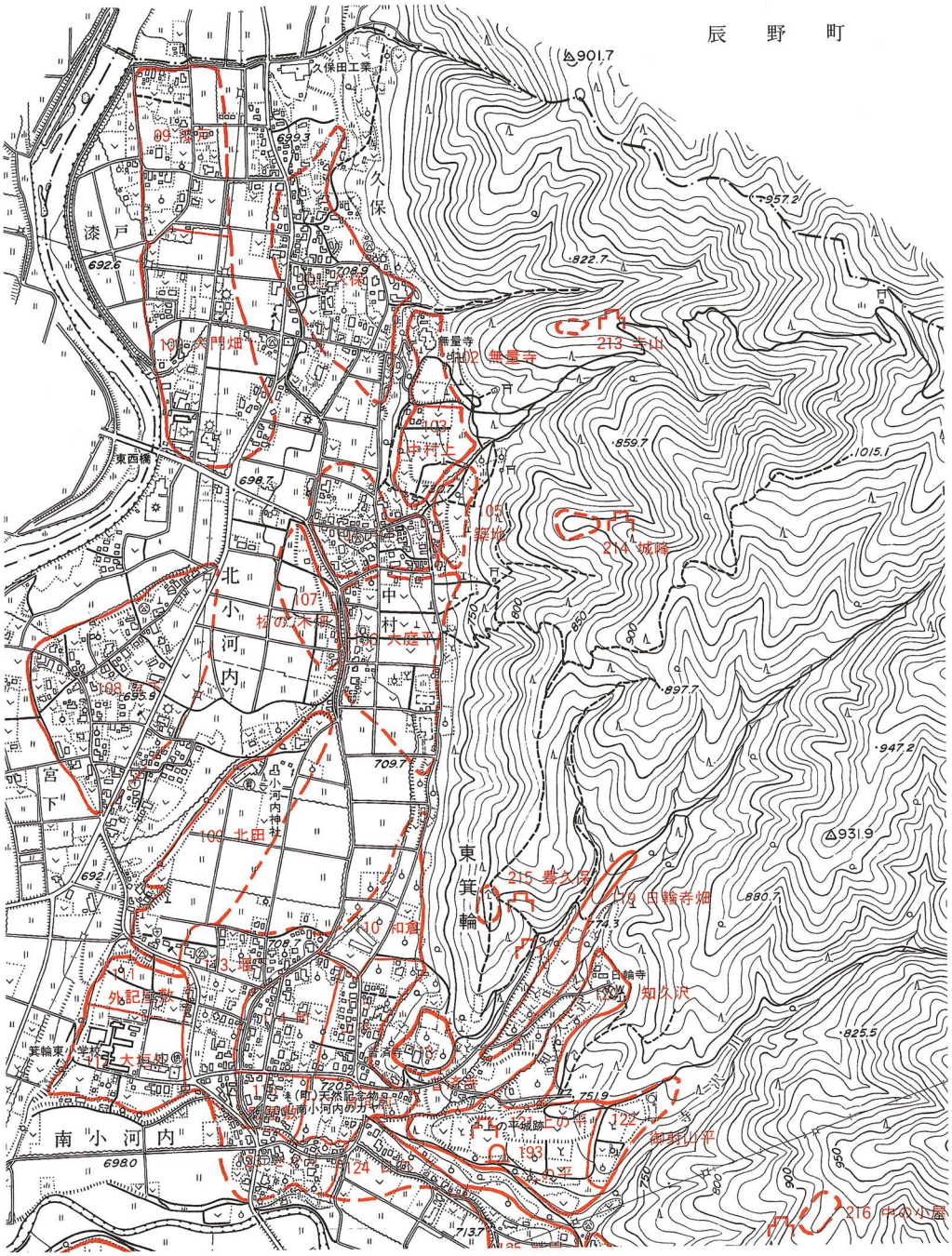
第２節　歴史環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など水源に恵まれており、先史より人が暮らしやすい格好の場が多い。町内には、先人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が残されており、平成６～８年度に実施した箕輪町遺跡詳細布調査では、包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯として知られている。

今回調査対象となった本遺跡を含む天竜川左岸北部地域（南・北小河内区）には、集落遺跡を中心として地形的な特徴によって遺跡の分布を観ることができる。北田遺跡（109）のように段丘突端または扇端部に広がる遺跡、山裾（扇頂部）及び山から伸びる舌状大地に点在する遺跡とに分けられるが、比較的狭い範囲ではあるが、南小河内区の現集落域等の扇央部にも遺跡がみられる。これまで実施された当地域における発掘調査の事例から、これらを代表する遺跡について概観しておく。

まず、段丘突端または扇端部の遺跡としては、大垣外遺跡(112)が箕輪東小学校の施設改築等に先立って平成元・４・５年度の過去３回に渡って調査が行われ、縄文時代中期初頭の住居址や土坑群が検出されている。特に第２次調査で検出した住居址からは、「河童型」の土偶頭部が出土しており、町内では最も古いものとして位置付けられている。

次に山裾及び舌状台地では、昭和63年度に箕輪ダム関連公園整備事業に先立ち普済寺遺跡（118）の調査では、縄文時代中期初頭の土坑群及び集石炉と、古銭・内耳鍋・石臼等を伴う室町～戦国時代の火葬墓と思しき遺構が検出されている。平成10～12年度には、長野県史跡上ノ平城跡（121）において主郭を中心に、史跡保存を目的とした内容確認調査を実施している。城跡は、平安時代末に築城された県



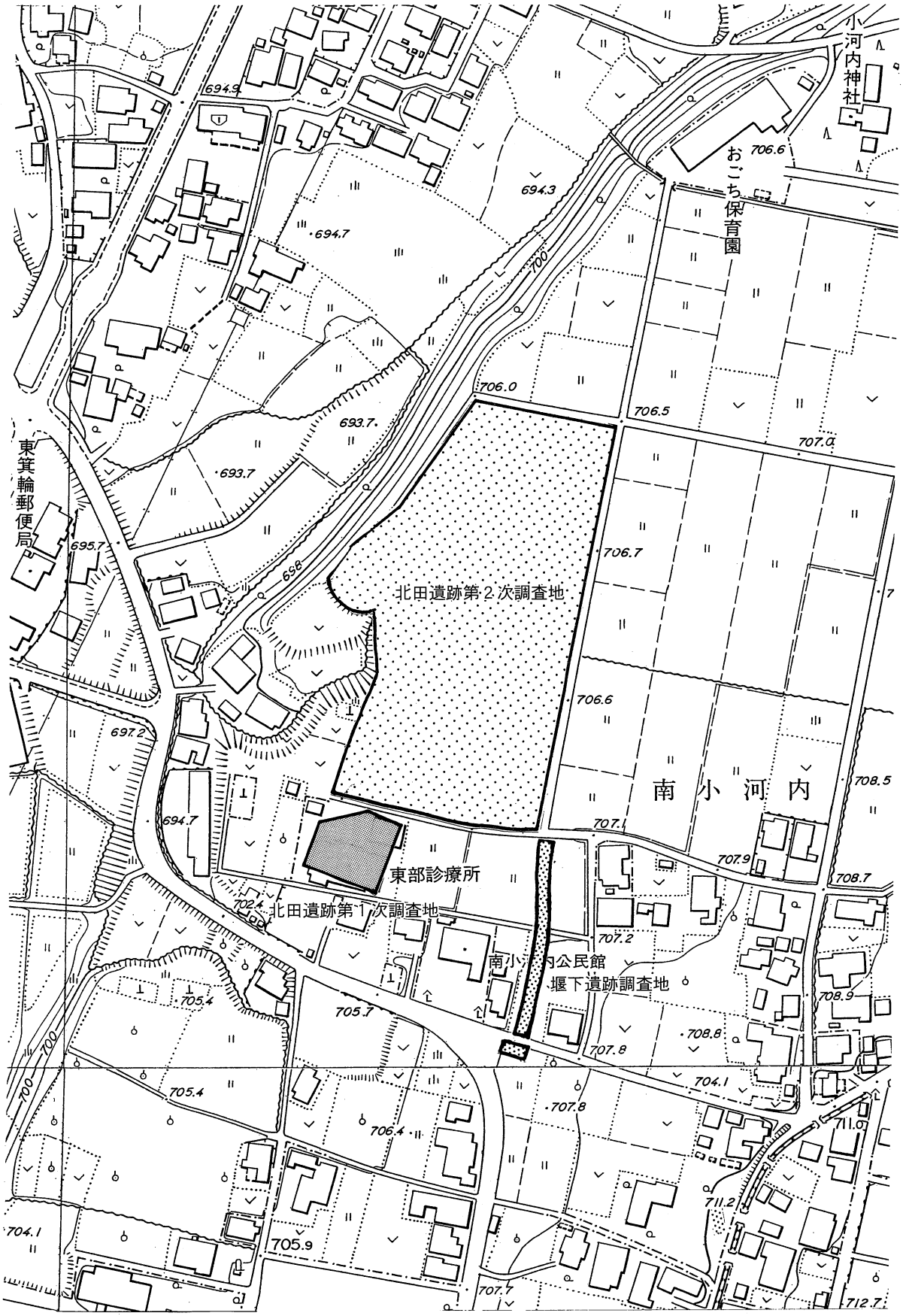
第２図　周辺遺跡分布図（１：20,000）

内でも古式な城として広く知られているが、調査では室町～戦国時代にも城として使用されていたことがわかり、主郭の外周に土塁が巡らされていたこと、また下段の二の郭との間に埋没した空堀が築かれていたことなど、新しい発見があった。

なお、東部山間部の尾根上には、土塁・空堀・郭等を有する山城が確認されている。いずれも城の規模としては小さなものが多く、狼煙台や物見台などの中継所的役割の城郭施設ではないかと推測される。これらは、室町～戦国時代を主にその機能を果していたものと考えられるが、詳細な調査は行われておらず、その内容は不明な点が多い。しかし、町内の中で確認されている山城の多くがこの山中に集中している点は、前述した上ノ平城跡との関連性を指摘する声も少なくない。

第１表　周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代								立地	地目	備考
			旧	縄	弥	古	奈	平	中	近			
109	北田	南小河内		○			○	○	○	○	段丘突端	宅地・田	平成４年調査
99	漆戸	北小河内		○	○			○			段丘突端	宅地・畑・田	
100	大門畑	〃		○				○			段丘突端	宅地・畑・田	
101	久保	〃		○				○	○	○	扇頂	宅地・畑	
102	無量寺	〃		○				○	○		段丘突端	宅地・畑	
103	中村上	〃		○				○	○		扇頂	宅地・畑	
104	中村	〃		○	○	○		○	○	○	扇頂	宅地	
105	築地	〃		○				○	○	○	段丘突端	宅地	
106	大庭平	〃		○				○	○	○	扇頂	宅地・畑	
107	松の木畑	〃			○			○	○		扇央	田	
108	宮下	〃		○				○	○	○	段丘突端	宅地・畑	
110	和倉	南小河内						○	○		扇頂	畑	
111	外記屋敷	〃		○				○			段丘突端	畑	
112	大垣外	〃		○				○	○	○	段丘突端	宅地・畑	平成元・４・５年調査
113	堰下	〃		○				○	○	○	扇央	宅地・畑・田	
114	町	〃		○				○	○	○	扇央	宅地・畑	
115	山本	〃		○				○	○	○	扇頂	宅地・畑	
116	殿屋敷	〃		○				○	○	○	扇央	宅地・畑	
117	日尚前	〃		○				○	○	○	扇頂	宅地・畑	
118	普済寺	〃		○					○	○	台地	宅地・畑	昭和63年調査
119	日輪寺畑	〃		○		○		○	○	○	台地	宅地・畑・荒地	城跡含む
120	知久沢	〃		○				○	○		扇頂	宅地・畑	
121	上ノ平	〃	○	○		○		○	○	○	台地	畑・荒地	県史跡、城跡含む 平成10～12年調査
122	御射山平	〃		○				○	○		台地	台地	
123	さがり	〃		○				○		○	扇央	宅地・畑・田	
124	日尚	〃		○	○			○			扇頂	田	
125	畦田	〃		○				○			扇頂	畑・田	
193	上ノ平古墳	〃				○					台地	畑	
213	寺山	北小河内							○		山頂	山林	城跡
214	城峰	〃							○		山頂	山林	城跡
215	豊久保	南小河内							○		山頂	山林	城跡
216	中の小屋	〃							○		山頂	山林	城跡



第３図　調査区位置図（１：2,500）

第Ⅲ章　調査結果

第１節　調査の方法と結果概要

今回の調査地は、昭和41・42年実施の農業基盤整備事業により、既に遺跡が破壊されていることが予測されたが、隣接地での過去の調査実施状況で、遺構が部分的に残されている結果が得られている。よって、敷地総面積15,794㎡の開発範囲内において、主に建物等構造物の建設部３ヵ所を１～３調査区と設定し、本発掘調査対象地とした。また、緑地及び駐車場用地については、現況を変えずにむしろ盛土が施されるので、あえて遺構保護のため調査対象から除外したが、将来的に施設増設も予測されることから、トレンチ掘削による遺構の有無等内容確認調査を実施した。

発掘調査の手順としては、対象範囲内を重機により各区の表土剥ぎとトレンチ掘削を行い、その後手作業による遺構上面確認作業、各検出遺構の掘り、土層堆積状況・検出遺構平面等の測量及び写真撮影による記録作業、遺物の取り上げの手順で行った。遺構及びトレンチの測量作業は、平面図は平板と簡易遣り方による１：10または１：20の縮尺で、土層断面図は同じく１：10または１：20の縮尺で作図した。写真撮影は、基本的に35㎜一眼レフカメラでモノクロとカラーリバーサルフィルムによる撮影を、また必要に応じて同２種のフィルムで６×７カメラを使用した。遺構及び出土遺物の記録における測量基準線は、調査地全域を国家座標の基準線を重ねて50ｍの大グリットを設定し、更にそこから10ｍの小グリットに分割した。標高の基準は、近接する基準点から標高移動し、第１・２調査区のコーナーと北部試掘調査区内の３箇所に任意にベンチマークを設定した。

調査の結果、主な個所で農業基盤整備事業時と思われる、大型重機による削平された状況が確認され、１号住居址のようにかろうじて盛土となった個所を中心に遺構が検出された。

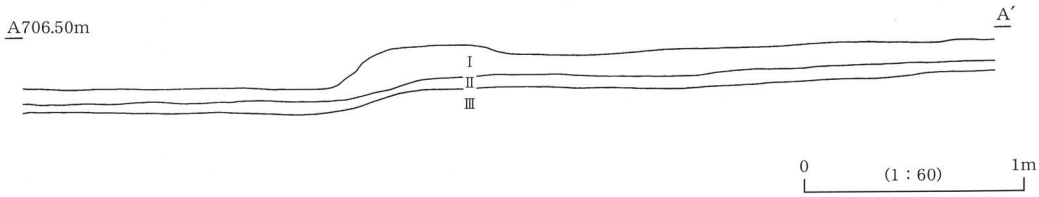
今回検出された遺構は以下のとおりである。

・竪穴住居址－１軒（奈良時代）
・土坑－４基（縄文時代、時期不明）
・竪穴建物址－１軒（室町～戦国時代）
・溝状遺構－１条（室町～戦国時代？）
・竪穴状遺構－１基（近世～近代）

調査前全景（南東より）

第２節　土層堆積状況

遺跡地は、東方の山裾から西方に緩やかに傾斜する扇状地の末端部に位置する。調査地の土層堆積状



第４図　基本土層図

況は、基本的に現水田耕作土（Ⅰ層）、基盤整備事業時の人為的堆積土（Ⅱ層）黄褐色のローム（テフラ）層（Ⅲ層）の３層に分けられる。遺構は、Ⅲ層確認面で検出されたが、部分的に盛土が厚く堆積している個所では、暗褐色のⅢ層漸位層が残されており、その確認面が遺構検出面であった。その状況は、試掘調査区で主に確認している。各層の詳細は以下のとおりである。

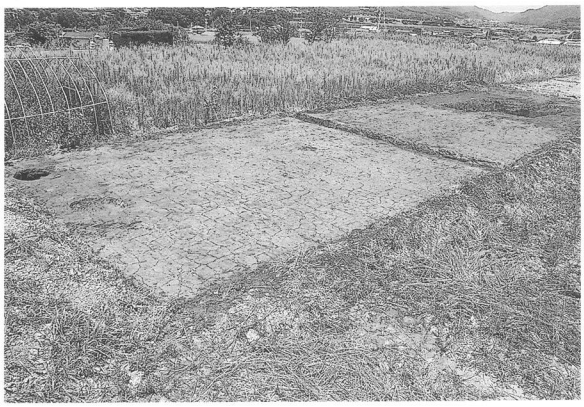
第Ⅰ層：10YR4/2（灰黄褐色）　現水田の耕土であり、炭化物・焼土を１％以下、0.1～0.2㎝の礫を５％含む。締り強、粘性中。

第Ⅱ層：10YR5/4（鈍い黄褐色）　基盤整備事業時の人為的堆積土。ロームブロックを50％以上、0.1～0.2㎝の礫を３％含む。締り強、粘性中。

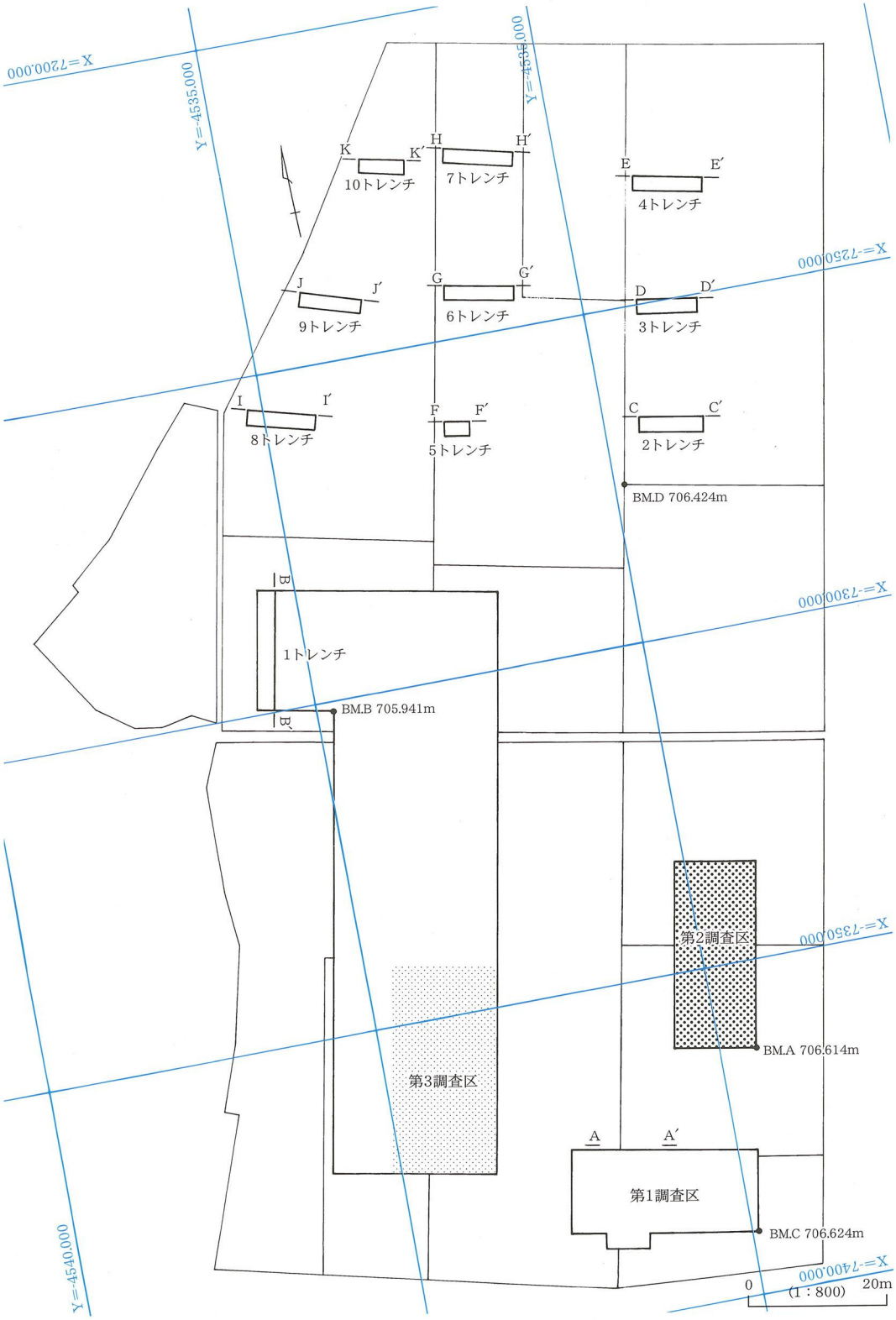
第Ⅲ層：10YR5/3（鈍い黄褐色）　ローム（テフラ）層で遺構確認層。締り強、粘性強。

第１調査区全景（西方より）

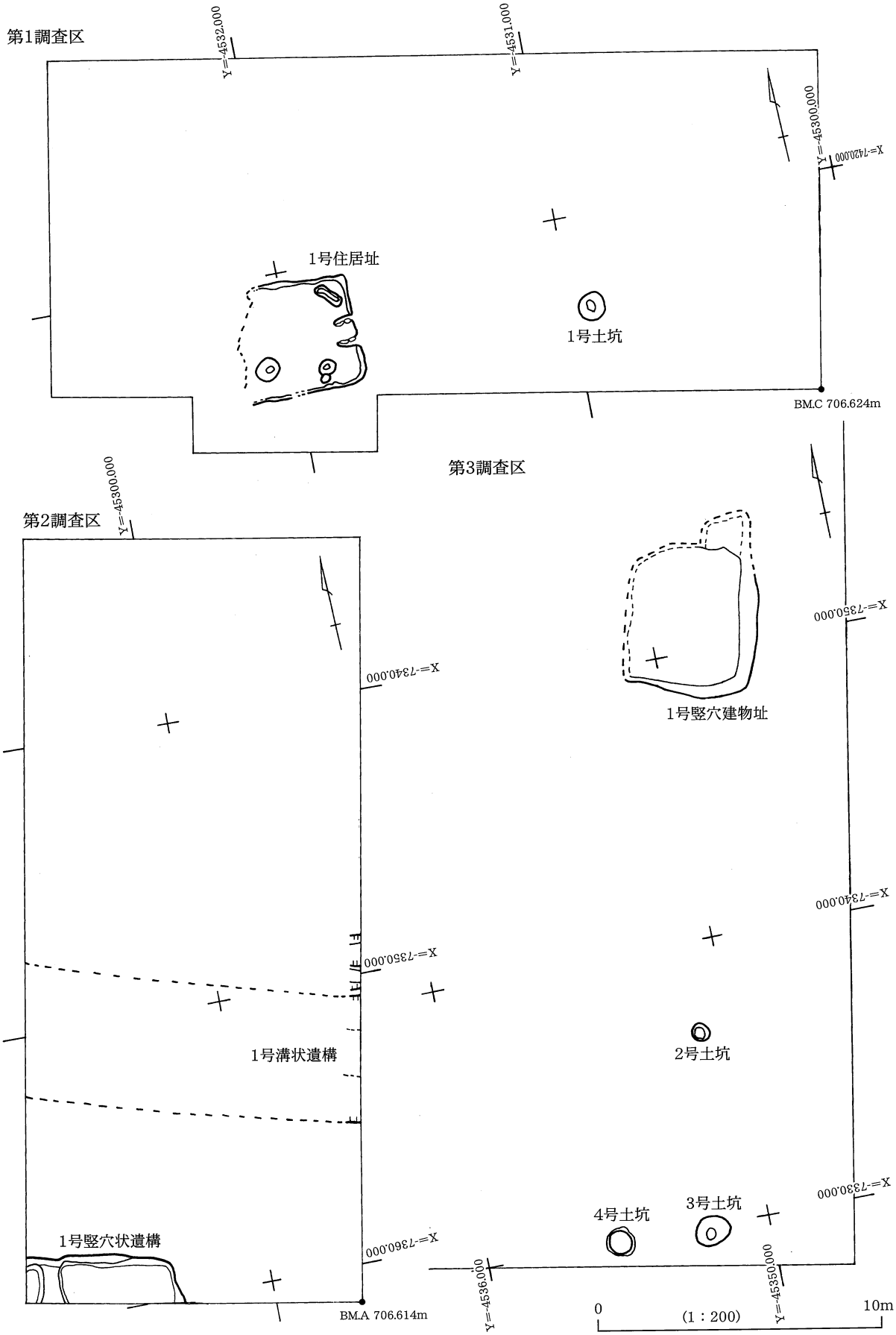
第２調査区全景（南方より）



第３調査区全景（南東より）



第５図　調査区・トレンチ設定図



第６図　調査区遺構検出状況全体図

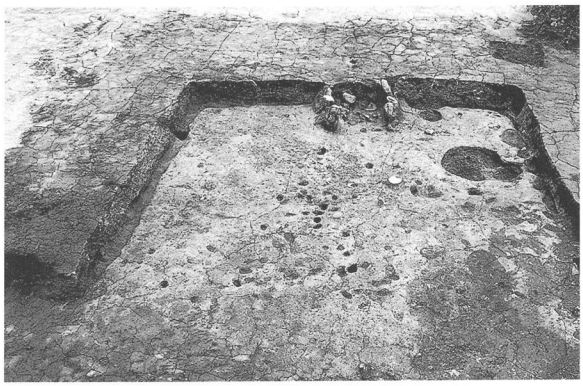
第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　検出遺構

１　竪穴住居址

１号住居址

遺構（第７図）　**位置**　第１調査区の南西部、国家座標Ｙ＝－4532.000、Ｘ＝－7418.000に位置する。**主軸方向**　カマドを中心とした主軸は、Ｎ－95°－Ｅを示す。**規模・形状**　南北4.18m、東西（4.07m）を測り、方形を呈する。遺構の西部は水田区画の土手に位置し、基盤整備工事時に削平されたものと考えられるが、床面の一部は残存する。**覆土**　９分層され、締りは比較的強い。全体的に各層ともローム粒子を多く含み、部分的に焼土や炭化物が含まれる。**床面・壁**　ほぼ平坦で、カマドの前面を中心に堅固に叩き締められており、２～10㎝の厚みでロームによる貼り床が施されている。壁残高は、20～30㎝余りを測り、遺構確認面からほぼ垂直に掘り込まれ、遺構の東部は比較的深く西部は浅い。また、壁下の周溝は、５～10㎝の深さでほぼ全域に巡らされる。周溝内には部分的にピット状の小さな窪みも何箇所か確認される。**カマド**　遺構東壁のほぼ中央部に築かれる。火焼部はカマドのほぼ中央に位置し、火焼状況は激しい。袖部はロームを主体とした粘土と縦長の河原転石の石材で構成される、石芯粘土カマドである。石材は、上部がやや内側に傾く形で床下まで埋め込まれ、断面では「ハ」の字状を呈している。また、石材の内側面はカマドの火焼面と思われ、著しく火熱を受け、赤褐色を帯びていた。**その他の施設**　カマドの右横に小穴１基（ピット１）が確認されたが、柱穴は確認されなかった。床下より土坑状の小穴４基（ピット２～４）を検出する。

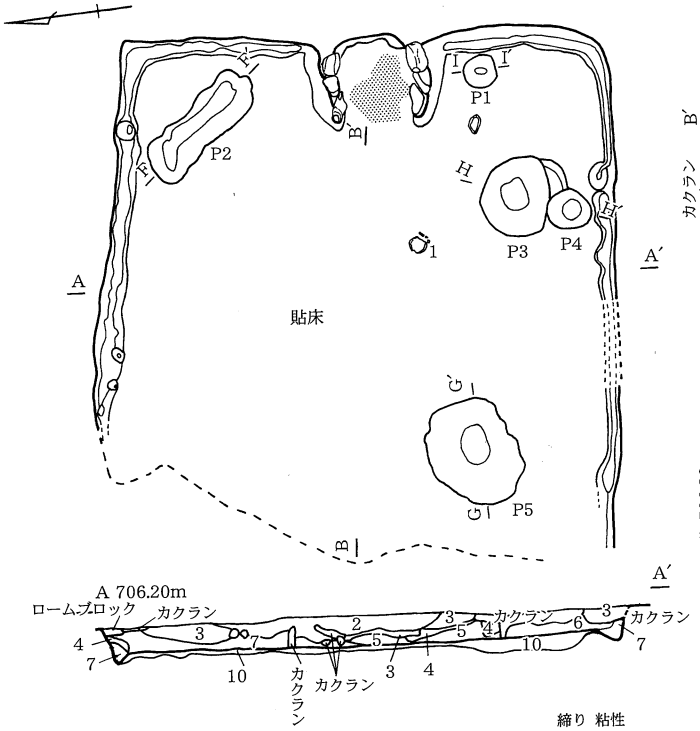


１号住居址全景

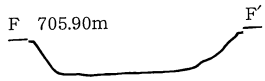
遺物（第８図）　カマドを中心に出土したが、全体的に出土量は少ない。須恵器は、坏蓋（1）、坏（2）、高台付坏（3）が、土師器は甕（４～６）が出土している。１は完

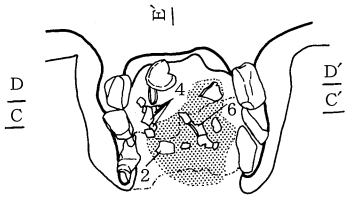
１号住居址カマド

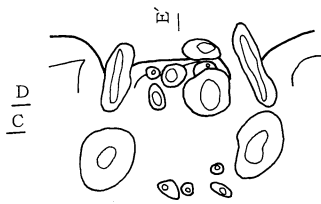
須恵器蓋出土状況

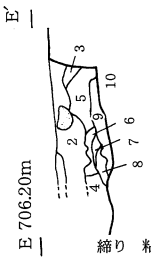


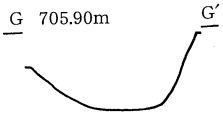
			締り	粘性
1層	10YR3/2（黒褐色）	ローム粒子を20%、カマド焼土を1%含む	強	強
2層	10YR3/3（暗褐色）	ローム粒子を3%、焼土を1%含む	強	中
3層	10YR3/2（暗褐色）	ローム粒子を50%含む	強	中
4層	10YR3/1（黒褐色）	炭化物を30%含む	強	強
5層	10YR3/3（暗褐色）	炭化物を10%含む	弱	強
6層	10YR4/4（黒褐色）	ローム粒子を20%、カマド焼土を1%含む	中	強
7層	10YR4/2（褐色）		強	強
8層	10YR5/6（灰黄褐色）	ローム粒子を10%含む	強	中
9層	10YR5/6（黄褐色）	ローム粒子を30%、焼土を3%含む	中	中
10層	10YR5/6（黄褐色）	貼床	強	強

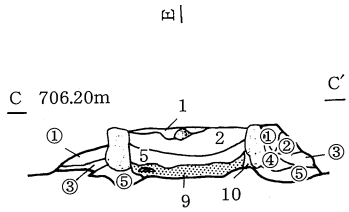




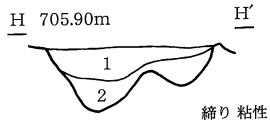




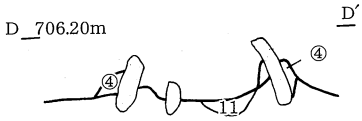


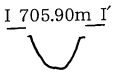


			締り	粘性
1層	10YR5/2（灰黄褐色）	カクラン、ロームをマーブル状に50%以上含む	強	中
2層	10YR3/3（暗褐色）	ロームブロックを5%含む、部分的に炭化物を1%含む	強	中
3層	10YR7/6（明黄褐色）	ロームブロックを50%以上、焼土を20%含む	強	中
4層	10YR3/3（暗褐色）	ロームブロックを5%、焼土を50%以上含む	強	強
5層	10YR3/3（暗褐色）	ロームブロックを5%、焼土を1%含む	強	強
6層	10YR7/6（明黄褐色）	ロームブロックを50%以上、焼土を30%含む	強	強
7層	10YR3/3（暗褐色）		中	強
8層	10YR7/4（鈍い黄橙色）	ロームブロックを50%以上、焼土を1%含む	強	強
9層	10YR5/6（明赤褐色）	カマドの燃焼部	強	強
		ロームブロック30%、焼土を50%以上含む	強	中
10層	10YR4/2（灰黄褐色）	焼土を50%以上含む		
11層	10YR4/3（鈍い黄橙色）	ロームブロックを5%、焼土10%、黒色土をブロック状に5%含む	強	中
①層	10YR4/2（灰黄褐色）	ロームブロックを5%含む	強	中
②層	10YR6/4（鈍い黄橙色）	ロームブロックを50%以上含む	強	強
③層	10YR3/3（暗褐色）	ローム粒子を3%含む	強	中
④層	10YR6/6（明黄褐色）	炭化物、焼土を5%含む	強	中
⑤層	10YR6/6（明黄褐色）	炭化物、焼土を5%含む	強	中



			締り	粘性
1層	10YR3/1（黒褐色）	ローム粒子を15%含む	中	中
2層	10YR5/6（黄褐色）	焼土、炭化物を1%含む	中	中



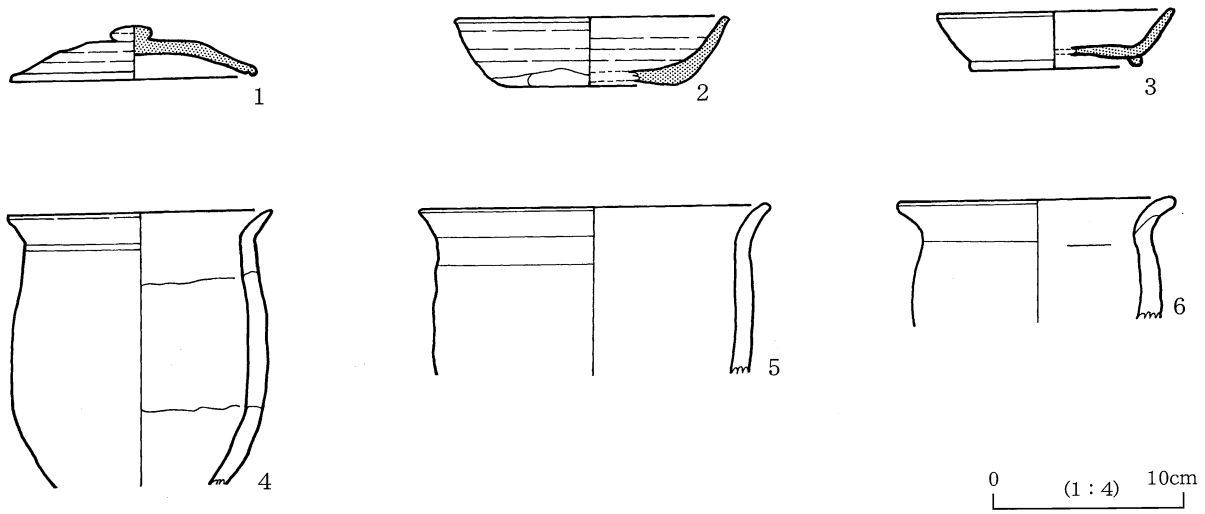


0 (1：40) 1m

第7図　1号住居址実測図

形の坏蓋が本址ほぼ中央の床面直上より出土しており、乳白色でよく精製された胎土で焼成もよく、美濃須恵器の所産と思われる。２の坏はカマド内より出土し、底部は無回転のヘラ切り離した後、体部に立ち上がる稜部にヘラケズリによる器面調整がなされる。図化した４～６の甕は、すべてカマド内より出土しており、外面は二次的な火熱により劣化が激しい。５・６はやや小型であるが、胴部の膨らみがあまり認められないので、長胴甕であろうか。

時期　本址は、上記出土遺物の特徴から、奈良時代後半（８世紀後半）に位置付けられよう。



第８図　１号住居址出土土器実測図

第２表　１号住居址出土土器観察表

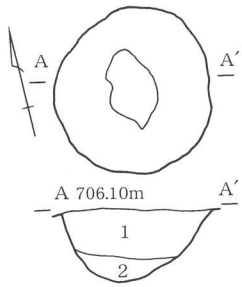
番号	種別	器　種	法量	残存度	成形・調整	色調・胎土	備　　考
1	須恵器	坏蓋	13.0 — 2.8	95%	ロクロ成形後宝珠摘貼付 外面　ロクロナデ・ヘラケズリ 内面　ロクロナデ"	外面　N7/灰白 内面　2.5Y7/2灰黄	焼成　良好　自然釉付着 美濃須恵
2	須恵器	坏	〈14.6〉 〈9.2〉 3.6	25%	ロクロ成形 外面　ロクロナデ･底部静止ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	外面　7.5Y4/1灰 内面　7.5Y4/1灰	焼成　良好
3	須恵器	高台付坏	〈12.4〉 〈9.0〉 3.1	25%	ロクロ成形後底部高台貼付 外面　ロクロナデ　底部ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	外面　10Y5/1灰 内面　10Y5/1灰	焼成　不良
4	土師器	甕	〈14.0〉 — (14.5)	20%	輪積み成形 外面　口縁ヨコナデ・胴部ナデ 内面　口縁ヨコナデ・胴部ナデ	外面　10YR7/4にぶい黄橙 内面　7.5YR6/6橙 砂粒・雲母少量含む	焼成　良好 外面二次焼成により劣化
5	土師器	甕	〈18.4〉 — (9.2)	10%	輪積み成形 外面　口縁ヨコナデ・胴部ナデ 内面　口縁ヨコナデ・胴部ナデ	外面　7.5YR4/3褐 内面　10YR5/2灰黄褐 0.2以下の砂粒・雲母含む	焼成　良好 外面炭化物付着
6	土師器	甕	〈14.6〉 — (6.5)	10%	輪積み成形 外面　口縁ヨコナデ・胴部ナデ 内面　口縁ヨコナデ・胴部ナデ	外面　7.5YR7/4にぶい橙 内面　7.5YR7/4にぶい橙 0.2以下の砂粒・雲母少量含む	焼成　良好 炭化物付着

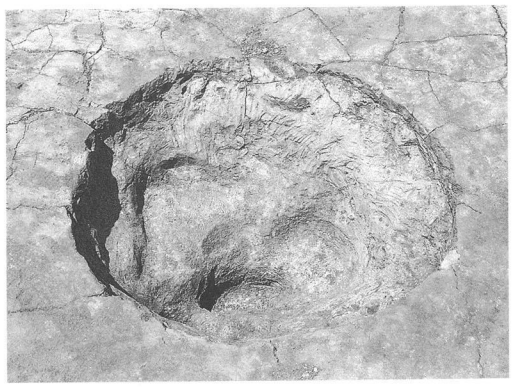
２　土　坑

遺構（第９図）平面形が、円形ないし楕円形を呈するもので、プランの大小及び掘り込みの深さにかかわらず、単独の小穴を土坑として扱った。第１調査区で１基（１号土坑）、第３調査区で３基（２～４号土坑）の４基を検出している。１号土坑からは、近代以降の磁器片が出土している。４号土坑は、底面が平坦で壁面が袋状にやや抉る形状のものは、過去の類例で縄文時代前期末から中期初頭に同様の特徴をもつものが確認されており、遺物も同時期の土器片が出土している。

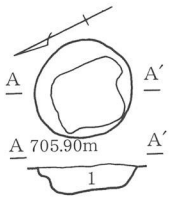
なお、個々の土坑の規模・形状等の特徴については、第３表を参照されたい。

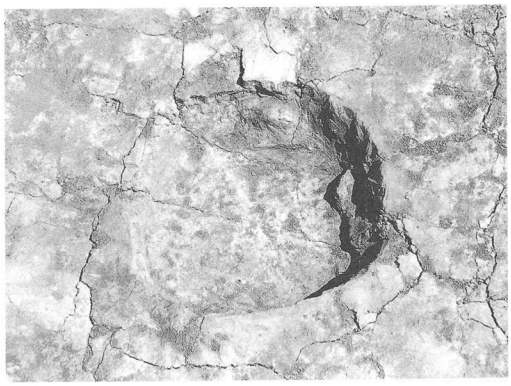
1号土坑



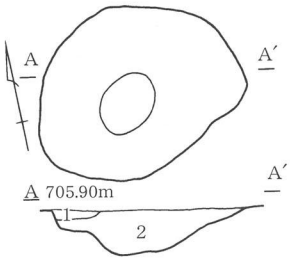


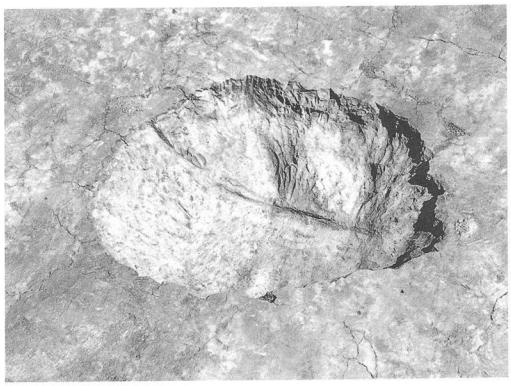
2号土坑



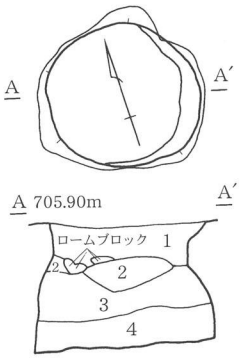


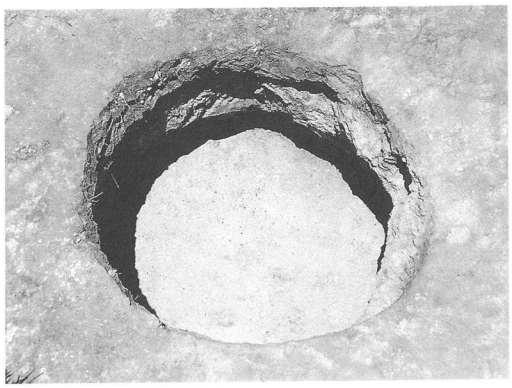
3号土坑





4号土坑





0 (1：40) 1m

第９図　土坑実測図

第３表　土坑一覧表

No.	位置	規模(cm) 長	短	深	平面形	断面形	覆土	粘性	締り	出土遺物	備考
1	第１調査区	103	90	45	円形	半円形	１層10ＹＲ3/2（黒褐色）　ローム粒子を3%、炭化物を5%含む	強	強	磁器	
							２層10ＹＲ4/3（鈍い黄褐色）　ローム粒子を20%含む	強	強		
2	第３調査区	60	60	15	円形	台形	３層10ＹＲ3/4（暗褐色）　ローム粒子を30%含む	強	強	なし	
3	第３調査区	125	60	25	不整形	不整形	１層10ＹＲ5/4（鈍い黄褐色）　カクラン	強	中	なし	
							２層10ＹＲ3/3（暗褐色）　炭化物を1%含むシルト	強	強		
4	第３調査区	95	90	75	円形	袋状	１層10ＹＲ3/3（暗褐色）　炭化物を1%含むシルト	強	強	縄文土器	
							２層10ＹＲ3/1（黒褐色）	弱	強		
							３層10ＹＲ4/4（褐色）　ローム粒子を50%以上含む	弱	強		

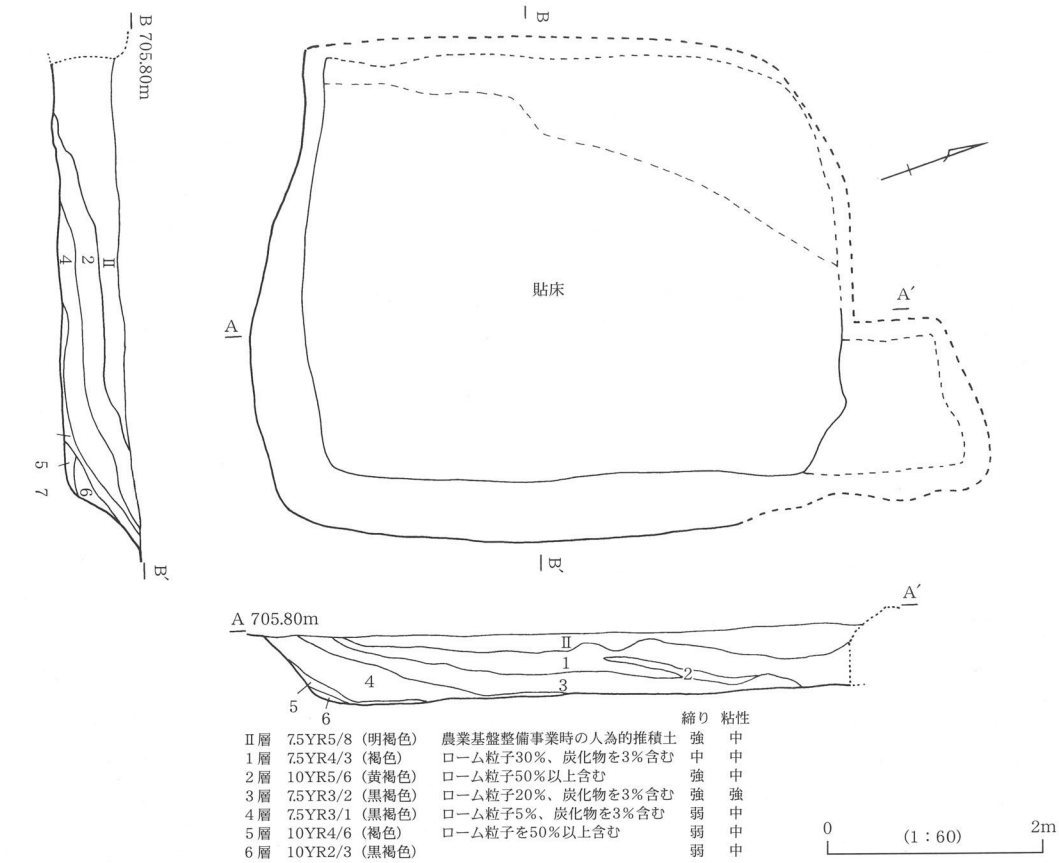
３　竪穴建物址

１号竪穴建物址

遺構（第10図）　**位置**　第３調査区の東部、国家座標Ｙ＝－4535.000、Ｘ＝－7350.000に位置する。**長軸方向**　長軸方向は、Ｎ－20°－Ｅを示す。**規模・形状**　南北（5.40）ｍ、東西（4.30）ｍを測り、長方形を呈する。遺構の西部と北部は、基盤整備時と思われる削平を受けており、床の残存状況でおおよその規模と形状を確認した。また、本址の北部には、一部溝址により切られ、砂礫が流入していた。**覆土**　７分層され、１層目は基盤整備時の人為的堆積土（Ⅱ層）が覆う。比較的南西方向からの自然堆積であり、ローム粒子と炭化物を含む黄褐色土及び黒褐色土の６層にて構成される。**床面・壁**　床面は、２～３㎝程度のロームを主体とした黄褐色土による貼り床であり、平坦で堅固な床である。壁は、やや傾斜を持って掘り込まれ、遺構確認面から70～80㎝の深さを有する。部分的に、床と同様の黄褐色土が貼り付けられ、堅固に壁が構築されていた。その他の施設　本址からは、柱穴跡等のピットや付随する他の構築物は確認されなかった。

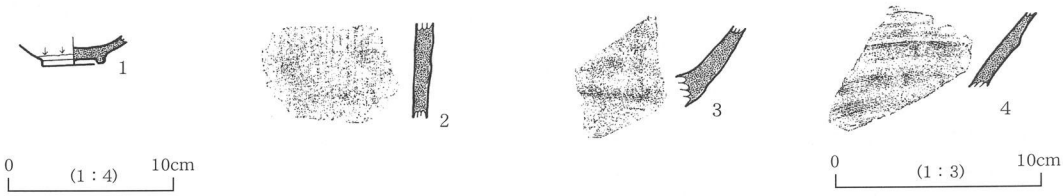
遺物（第11・12図）　遺物は、土器類及び金属器で、床直上で数点の土器片がみられたが、全体的な出土量は極めて少量であった。土器類は、瀬戸美濃系灰釉碗（１）、須恵器に極めて類似する甕（２）、詳細不明鉢（３）、山茶碗？（４）、青磁碗、カワラケ等が見られる。金属器は、小型の釘が13点出土し、うち断面円形を呈するもの３点（１・６・７）が、断面方形を呈するもの10点（２～５、８～13）であるが、後者が主体を占めている。他に、用途不明な鉄片２点(14･15)がある。

１号竪穴建物址



			締り	粘性
Ⅱ層	7.5YR5/8（明褐色）	農業基盤整備事業時の人為的推積土	強	中
1層	7.5YR4/3（褐色）	ローム粒子30%、炭化物を3%含む	中	中
2層	10YR5/6（黄褐色）	ローム粒子50%以上含む	強	中
3層	7.5YR3/2（黒褐色）	ローム粒子20%、炭化物を3%含む	強	強
4層	7.5YR3/1（黒褐色）	ローム粒子5%、炭化物を3%含む	弱	中
5層	10YR4/6（褐色）	ローム粒子を50%以上含む	弱	中
6層	10YR2/3（黒褐色）		弱	中

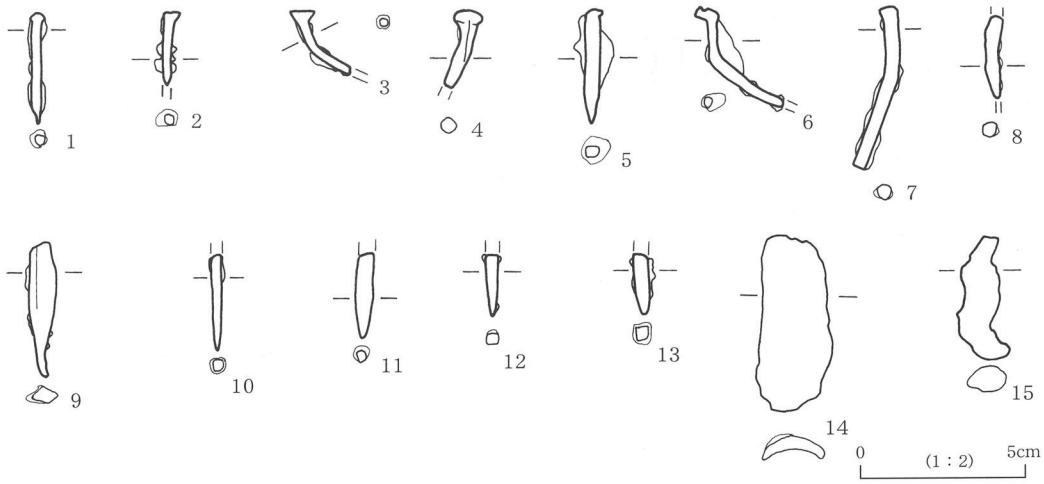
第10図　1号竪穴建物址実測図



第11図　1号竪穴建物址出土土器類実測図　拓影図

第4表　1号竪穴建物址出土土器類観察表

番号	種類	器種	法量	残存度	文様・調整	色調・胎土	備考
1	陶器	碗	— 〈3.8〉 (1.7)	15%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　灰釉 外面　灰釉	2.5Y6/2灰黄	灰釉漬掛け
2	陶器	甕	— — (4.3)	ごく少量	ロクロ成形 内面　ロクロナデ 外面　ロクロナデ	7.5YR4/1褐灰	
3	陶器	鉢	— — (3.5)	ごく少量	ロクロ成形 内面　ロクロナデ 外面　ロクロナデ	2.5Y6/1黄灰	
4	陶器	山茶碗	— — (4.6)	ごく少量	ロクロ成形 内面　ロクロナデ 外面　ロクロナデ	5Y7/1灰白	



第12図　１号竪穴建物址出土金属器実測図

第５表　１号竪穴状遺構出土金属製品観察表

（法量㎝・ｇ）

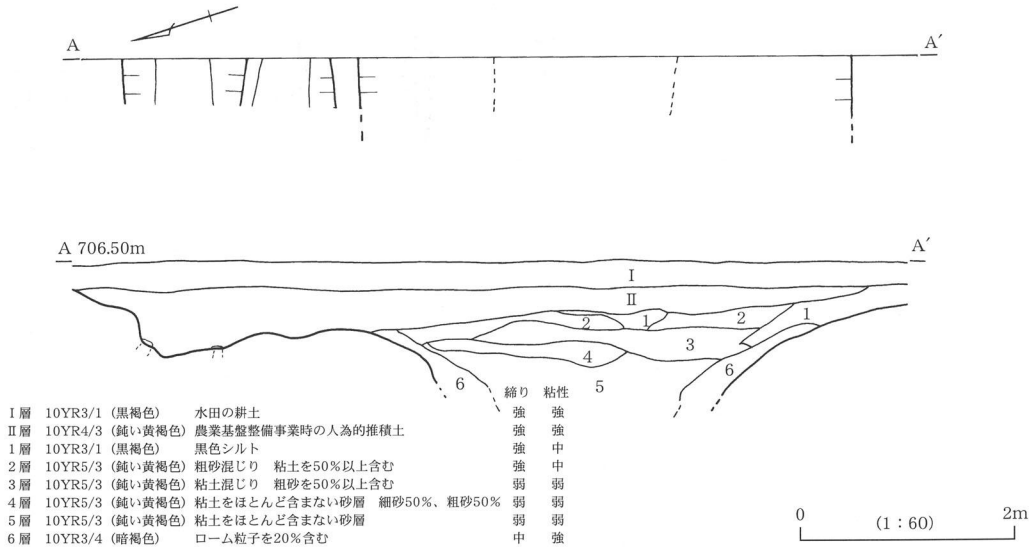
番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	遺存状態	備考
1	釘	鉄	3.4	0.3	0.3	0.9	完形	断面　丸形
2	釘	鉄	(2.3)	0.3	0.3	(1.0)	一部欠損	断面　四角形
3	釘	鉄	(2.6)	0.3	0.2	(1.0)	一部欠損	断面 四角形
4	釘	鉄	(2.3)	0.5	0.4	(1.0)	一部欠損	断面　四角形　鍛打成形　頭部に地金段階での折り返しと思われる切込み確認
5	釘	鉄	3.5	0.5	0.4	3.0	完形	断面　四角形 頭部形状不明
6	釘	鉄	(4.0)	0.3	0.3	(2.0)	一部欠損	断面　丸形
7	釘	鉄	(5.0)	0.4	0.4	(2.3)	一部欠損	断面　丸形
8	釘	鉄	(2.5)	0.5	0.4	(1.0)	一部欠損	断面　四角形
9	釘	鉄	(4.2)	0.5	0.5	(3.0)	一部欠損	断面　四角形
10	釘	鉄	(3.0)	0.3	0.3	(0.5)	一部欠損	断面　四角形
11	釘	鉄	(2.6)	0.5	0.4	(1.0)	一部欠損	断面　四角形
12	釘	鉄	(1.9)	0.4	0.4	(0.8)	一部欠損	断面　四角形
13	釘	鉄	(1.9)	0.4	0.4	(1.0)	一部欠損	断面　四角形
14	不明	鉄	(5.4)	(2.3)	(0.8)	(11.2)	一部欠損	断面　三日月形
15	不明	鉄	(3.7)	(1.1)	(0.8)	(47.0)	一部欠損	断面　丸形

４　溝状遺構

１号溝状遺構

遺構（第13図）　位置　第２調査区のほぼ中央部で、調査区を東西に横切る状況で確認したが、調査区の東部にサブトレンチを設定し遺構の掘削をした。掘削個所は、国家座標Ｙ＝－4525.000、Ｘ＝－7353.000である。方向　方向は、調査区東部から西部にかけて、Ｎ－43°－Ｗに向かう。**規模・形状**　幅は南北に3.8mを測り、長さは11m余りを確認。深さは検出面から推定2.0m以上と思われるが、土砂の崩落の危険性があったため、1.3mまでの掘削に止めた。法面は、確認確認面からは緩やかに傾斜するが、40㎝ほどの深さから急角度となる。恐らく、「Ｖ」字状を呈する断面形で

１号溝状遺構



第13図　1号溝状遺構実測図

あろう。本址のこのような特徴は、室町時代末から戦国時代の城郭遺構に見られる空堀の構築状況と類似性が感じられる。**覆土**　覆土は6分層を確認し、全体的に粗砂及び細砂が主体を締め、水流によりそれらが運搬・堆積した状況が伺えた。

遺物　本址からの遺物の検出はない。

時期　本址は、時期判定する遺物の出土がないため不明である。

5　竪穴状遺構

1号竪穴状遺構

遺構（第14図）　位置　第2調査区の南部コーナーに検出したが、調査区の境界に検出したため遺構は全掘していない。国家座標Y＝－4535.000、X＝－7336.000に位置する。**方向**　長軸方向は、N－76°－Wを示す。規模・形状　南北（1.70）m、東西（5.50）mを測り、検出範囲での形状は長方形を呈するが、前述のとおり遺構は調査区外に埋没するため、全体の規模及び形状は不明である。

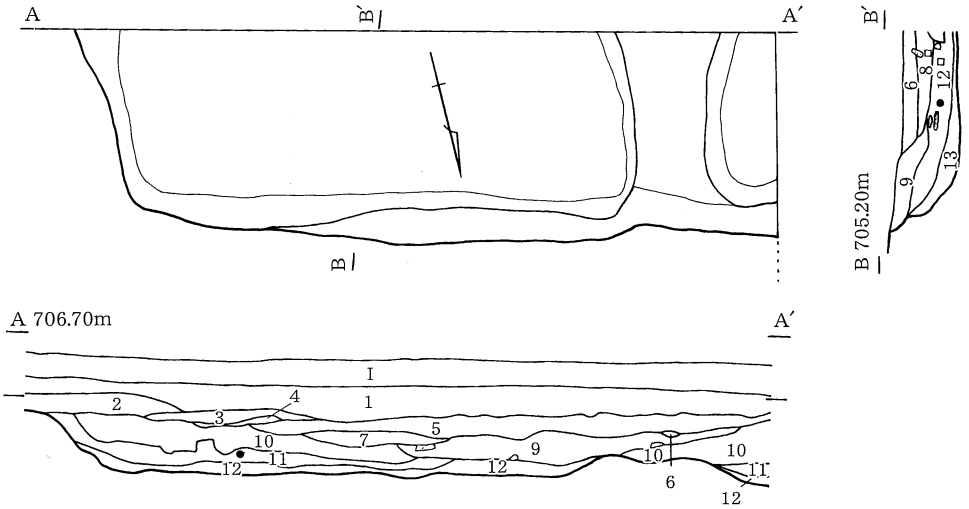
・覆土　12分層される。比較的北東方向からの自然堆積を基本としているが、特にローム粒子・焼土・炭化物を含む4～10層の堆積は不規則で遺物の混入も多く、人為的な疑いもある。**床面・壁**　床面は、ほぼ平坦であったが、軟弱で特に叩き締めた状況はなく、また遺構の西側には床を仕切るように土手が残される。壁は、やや傾斜を持って掘り込まれ、遺構確認面から40～60㎝の深さを有する。**その他の施設**　本址からは、柱穴跡等のピット

1号溝状遺構

や付随する他の構築物は確認されなかった。

遺物（第15・16図） 遺物は、土器類及び金属器で主に覆土中から多く出土し、その量は他の遺構と比べて極めて多い。土器類としては、磁器は肥前系他の小碗（1～4）、陶器は瀬戸・美濃系の小碗（5）、中碗（6・7）、急須（8）、中皿（9～11）、瀬戸・美濃系灯明皿（12～15）、小皿（16～18）他、土師器系はホウロク（19）が見られる。金属器は、煙管の吸口（1）、小型の釘（2～4）が、石器は、砥石（5）が出土している。

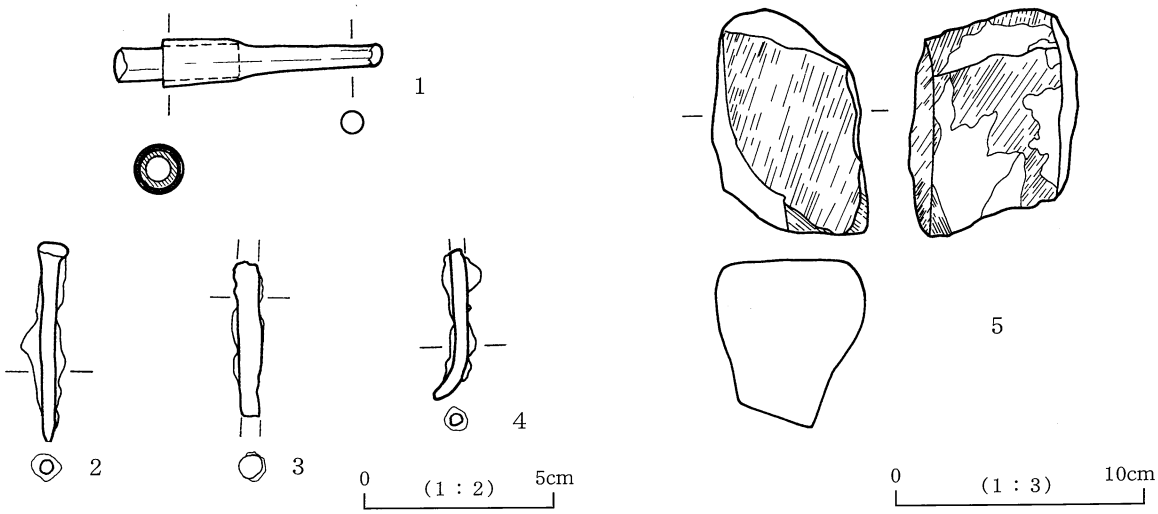
時期 本址は、出土した陶・磁器の特徴から、近世末～近代に時期判定を想定する。



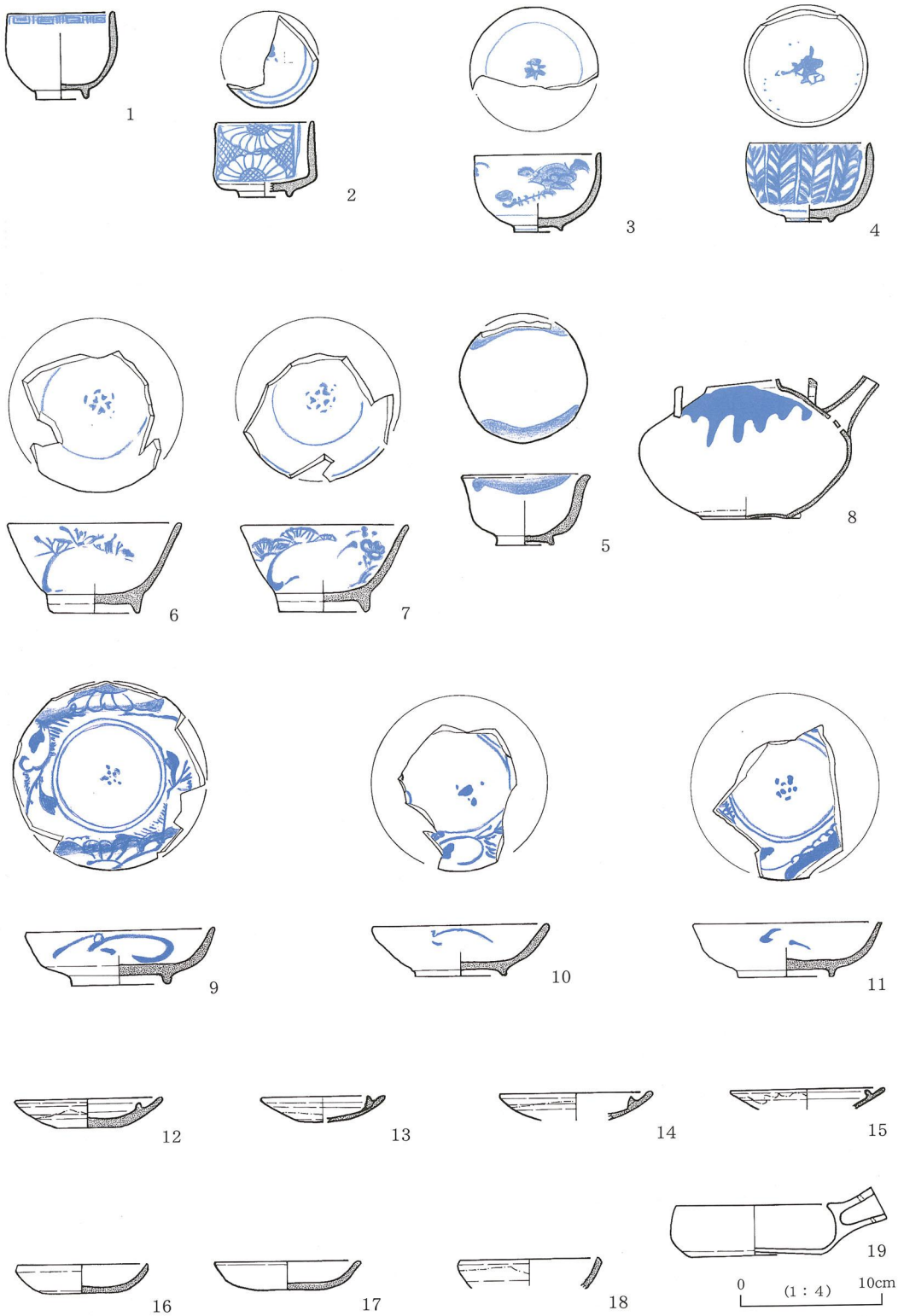
			締り	粘性
Ⅰ層	10YR3/1（黒褐色）	水田の耕土	強	中
1層	10YR3/3（黒褐色）	黒色シルト	中	中
2層	2.5Y4/3（オリーブ褐色）	ローム粒子を3％含む	強	中
3層	2.5Y3/1（黒褐色）	ローム粒子・焼土・炭化物を1％以下含む	中	中
4層	2.5Y4/4（オリーブ褐色）	ローム粒子を50％以上マーブル状に含む	中	中
5層	2.5Y3/2（黒褐色）	ローム粒子・焼土・炭化物を30％含む	中	中
6層	2.5Y4/3（オリーブ褐色）	ローム粒子を50％以上含む	中	強
7層	2.5Y3/1（黒褐色）	焼土・炭化物を3％、木片を1％含む	強	強
8層	2.5Y5/4（黄褐色）	ローム粒子を50％以上、焼土・炭化物を5％含む	強	中
9層	2.5Y3/2（黒褐色）	礫層　径2～5cmの礫を25％含む	中	強
10層	2.5Y4/2（暗灰黄色）	ローム粒子を30％、炭化物を1％含む	強	強
11層	2.5Y3/1（黒褐色）	焼土・炭化物3％、木片1％、径2～10cmの礫・陶磁器類を1％以下含む	弱	強
12層	2.5Y4/1（黄灰色）	ローム粒子を10％含む	弱	強

0　(1：60)　2m

第14図　1号竪穴状遺構実測図



第15図　1号竪穴状遺構金属器・石器実測図



第16図　1号竪穴状遺構出土土器類実測図

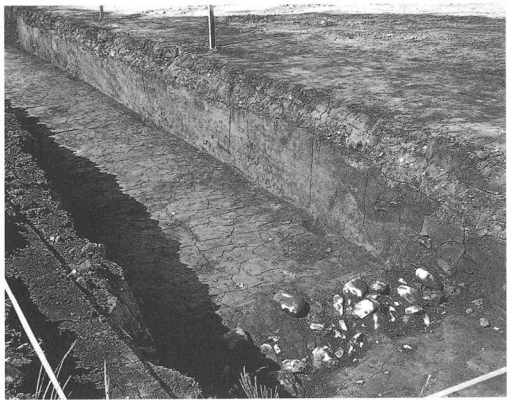
第６表　１号竪穴状遺構出土金属器・石器観察表

（法量cm・g）

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	煙管(吸口)	銅・竹	(5.8)	1.15	0.5	(10.0)	雁首なし	ラウ一部残存（竹製）
2	釘	鉄	5.4	0.5	0.5	4.0	完　　形	断面　四角形　　鍛打成形
3	釘？	鉄	(4.0)	0.6	0.6	(3.3)	一部欠損	断面　丸形
4	釘	鉄	(3.4)	0.4	0.35	(3.0)	一部欠損	断面　四角形　　鍛打成形
5	砥石	安山岩	(8.9)	(4.8)		(437.0)	一部欠損	破損部分に二次加工痕

第７表　１号竪穴状遺構出土土器類観察表

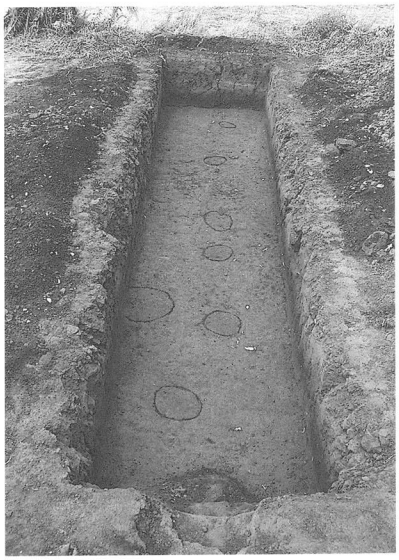
番号	種別	器種	法量	残存度	成形・文様・調整	色調・胎土	備考
1	磁器 (染付)	小碗 (湯呑)	8.6 3.6 6.2	70%	ロクロ成形　高台削り出し 内面 外面　雷文	7.5YR8/1灰白	透明釉
2	磁器 (染付)	小碗 (湯呑)	7.2 3.8 5.4	30%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　一重圏線・花文・格目 外面　花文・格目・四方襷	7.5YR8/1灰白	透明釉
3	磁器 (染付)	小碗 (湯呑)	9.0 3.4 5.6	60%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　三重圏線 見込　四方襷 外面　草花・蝶・三重圏線	7.5YR8/1灰白	透明釉
4	磁器 (染付)	小碗 (湯呑)	8・6 3.3 5.6	85%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　貫入・四方襷 外面　綾杉文	7.5YR8/1灰白	透明釉
5	陶器	小碗 (湯呑)	9.0 4.2 5.1	95%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　呉須口縁掛流し 外面　呉須口縁掛流し	7.5YR7/2明褐灰	透明_
6	陶器	中碗	12.4 6.4 6.5	40%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　貫入　一重圏線 見込　五弁花 外面　松	2.5Y7/3浅黄	染付・透明釉　貫入
7	陶器	中碗	11.6 6.4 6.3	45%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　貫入　一重圏線 見込　五弁花 外面　松	2.5Y7/3浅黄	染付・透明釉　貫入
8	陶器	急須 (流掛土瓶)	5.2 6.2 10.2	95%	ロクロ成形　把手・注口貼付 内面　鉄釉？ 外面　流掛	7.5YR4/6褐	透明釉
9	陶器	中皿	13.6 7.0 3.9	90%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　草花・二重圏線・貫入 外面　草花	2.5Y7/3浅黄	染付・透明釉
10	陶器	中皿	12.4 6.4 3.7	40%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　草花・二重圏線　貫入 外面　草花	2.5Y7/3浅黄	染付・透明釉
11	陶器	中皿	13.4 6.7 3.9	40%	ロクロ成形　高台削り出し 内面　草花・二重圏線　貫入 外面　草花	2.5Y7/3浅黄	染付・透明釉
12	陶器	灯明皿	〈10.4〉 〈4.4〉 2.1	30%	ロクロ成形　無高台　平形 内面　灰釉 外面　口縁部灰釉	2.5Y6/2灰黄	外面炭化物付着 瀬戸・美濃
13	陶器	灯明皿	〈8.8〉 — (1.8)	20%	ロクロ成形　無高台　平形 内面　鉄釉 外面　口縁部鉄釉	2.5Y8/3淡黄	瀬戸・美濃
14	陶器	灯明皿	〈10.8〉 〈4.6〉 (2.1)	30%	ロクロ成形 内面　鉄釉 外面　口縁部鉄釉(泥)	2.5Y8/3淡黄	燈芯受け有 瀬戸・美濃
15	陶器	灯明皿	〈10.8〉 — 〈1.5〉	20%	ロクロ成形 内面　鉄釉 外面　口縁部鉄釉(泥)	2.5Y8/3淡黄	瀬戸・美濃
16	陶器	灯明皿	10.4 4.4 2.0	100%	ロクロ成形　無高台　平形 内面　鉄釉 外面　鉄釉	2.5Y5/2暗灰黄	外面油煙付着 内面重ね焼きの溶着痕 瀬戸・美濃？
17	陶器	灯明皿	9.2 3.8 2.1	100%	ロクロ成形　無高台　平形 内面　灰釉 外面　灰釉	2.5Y7/4浅黄	内面重ね焼きの溶着痕 瀬戸・美濃？
18	陶器	灯明皿？	〈10.0〉 — (2.1)	20%	ロクロ成形 内面　透明釉 外面　口縁部透明釉	2.5Y6/2灰黄	外面炭化物あるいは漆付着
19	土師質	焙烙 (ホウロク)	〈10.0〉 (9.6) 5.7	40%	ロクロ成形　把手貼付 内面 外面	7.5YR5/4にぶい褐	柄の部分は木の柄を差し込んで固定する穴が開けられている。



1トレンチ土層堆積状況

2トレンチ

4トレンチ



3トレンチ

5トレンチ土層堆積状況

7トレンチ土層堆積状況

第２節　試掘調査の結果

調査地の北部に位置する駐車場及び緑地帯となる個所と第３調査区北部において、遺構の有無と内容確認のため、10本のトレンチを設定し試掘調査を行った（第４・17・18図）。

１トレンチ

第３調査区北部において、南北方向に長さ18.0m、幅2.0m、深さ0.8～0.9mで掘削した。堆積土は７分層され、現水田下部は農業基盤整備事業によるおよそ0.7m人為的堆積土を確認し、その直下から旧水田耕土（６層）を確認した。また、トレンチ南部には、旧水田関連と考えられる畦及び杭列を伴う水路跡を確認している。遺構及び遺物の検出はしていない。

２トレンチ

東西方向に長さ9.0m、幅2.0m、深さ0.8mで掘削した。堆積土は７分層され、７層確認面でピット８基及び溝状遺構１条を検出した。５層中より縄文土器等少量の遺物が出土している。

３トレンチ

東西方向に長さ8.5m、幅2.0m、深さ0.9mで掘削した。堆積土は７分層され、７層確認面でピット７基を検出した。

４トレンチ

東西方向に長さ9.0m、幅2.0m、深さ0.7mで掘削した。堆積土は７分層され、７層確認面で土坑１基、溝状遺構２条、住居址？１軒を検出した。遺構確認時に５及び６層から縄文土器等少量の遺物を出土している。

５トレンチ

東西方向に長さ5.0m、幅2.0m、深さ0.9～1.7mで掘削した。堆積土は９分層され、トレンチの東部には旧河道と思われる傾斜を確認した。遺構及び遺物の検出はしていない。

６トレンチ

東西方向に長さ9.0m、幅2.0m、深さ0.5mで掘削した。堆積土は３分層され、現耕土下は農業基盤整備事業による削平を受けていた。遺構及び遺物の検出はしていない。

７トレンチ

東西方向に長さ9.0m、幅2.0m、深さ0.3mで掘削した。堆積土は２分層され、現耕土下は農業基盤整備事業による削平を受けていた。遺構及び遺物の検出はしていない。

８トレンチ

東西方向に長さ9.0m、幅2.0m、深さ0.3mで掘削した。堆積土は２分層され、現耕土下は農業基盤整備事業による削平を受けていた。遺構及び遺物の検出はしていない。

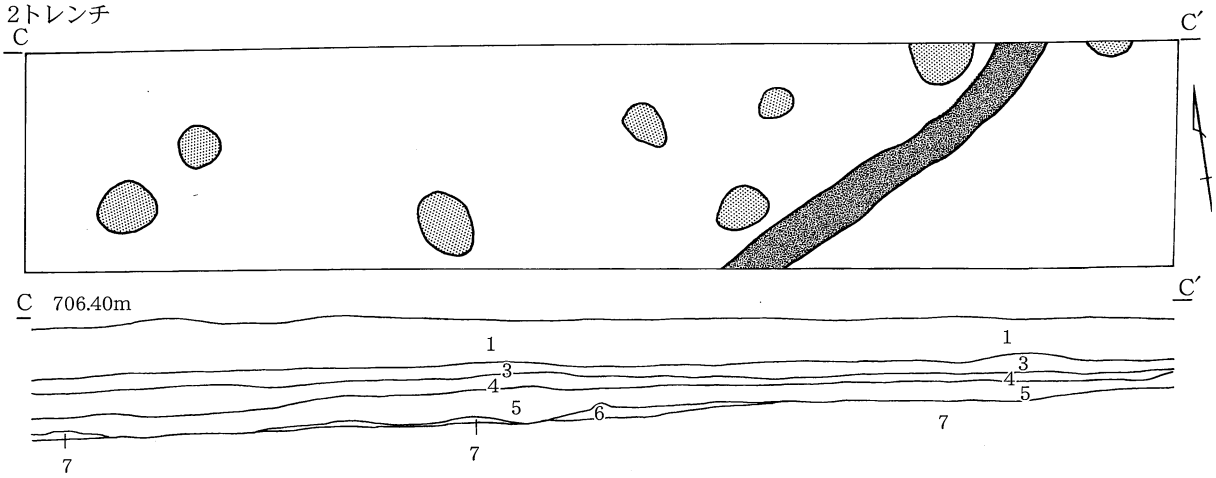
９トレンチ

東西方向に長さ9.0m、幅2.0m、深さ0.3mで掘削した。堆積土は２分層され、現耕土下は農業基盤整備事業による削平を受けていた。遺構及び遺物の検出はしていない。

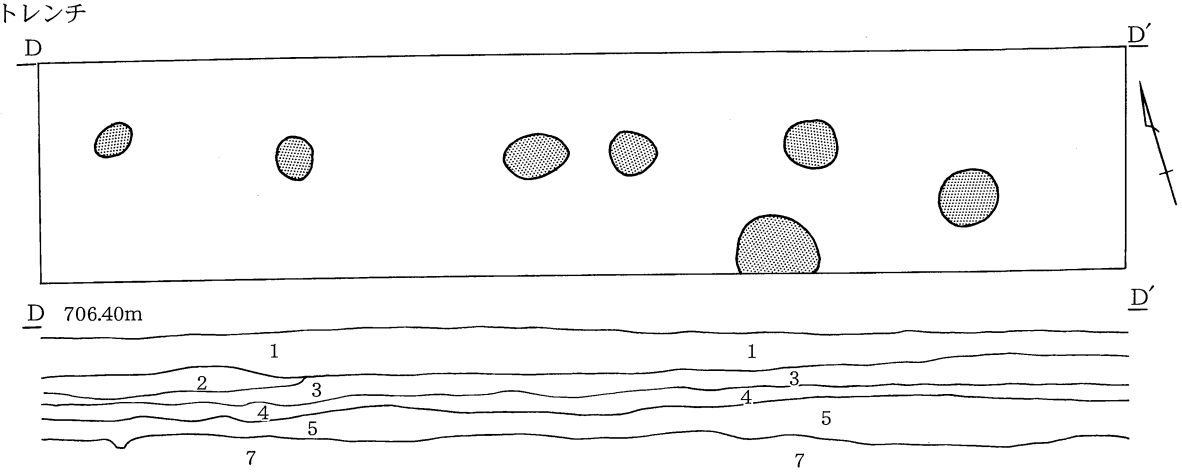
10トレンチ

東西方向に長さ6.5m、幅2.0m、深さ0.3mで掘削した。堆積土は２分層され、現耕土下は農業基盤整備事業による削平を受けていた。遺構及び遺物の検出はしていない。

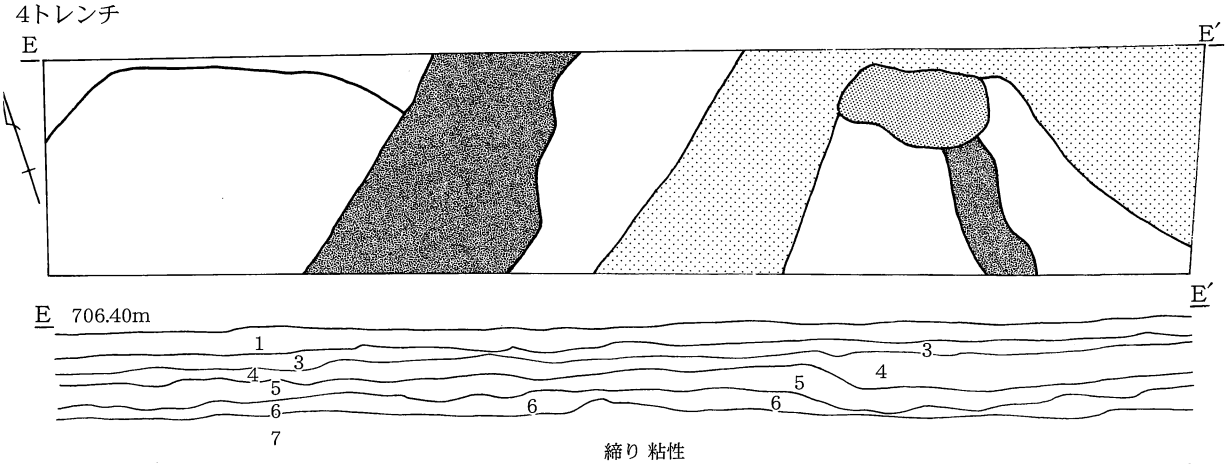
2トレンチ



3トレンチ



4トレンチ



			締り	粘性
1層	10YR4/2（灰黄褐色）	水田の耕土（Ⅰ層）	強	中
2層	10YR5/8（黄褐色）	水田耕作時の人為的推積土（Ⅱ層）	強	強
			強	強
3層	7.5YR4/4（褐色）	水田の敷	強	強
4層	7.5YR4/3（褐色）	旧水田層	強	強
5層	7.5YR2/2（黒褐色）	遺物包含層	強	強
6層	7.5YR3/3（暗褐色）	ローム粒子を10％含む	中	中
7層	7.5YR4/4（褐色）	漸移層　遺物包含層		

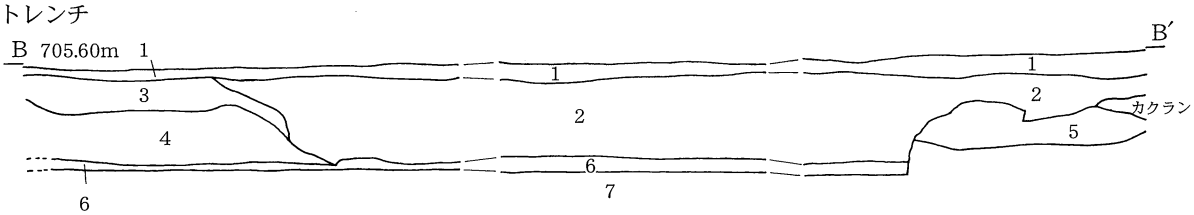
0　(1：60)　2m

凡 例

ピット・土坑　溝状遺構　住居址？

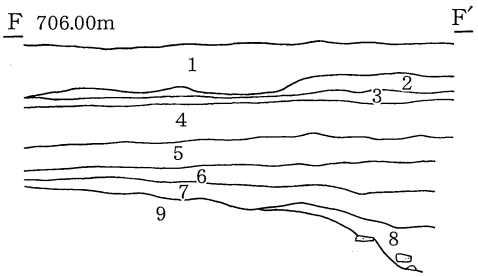
第17図　試掘トレンチ実測図・土層断面図

1トレンチ



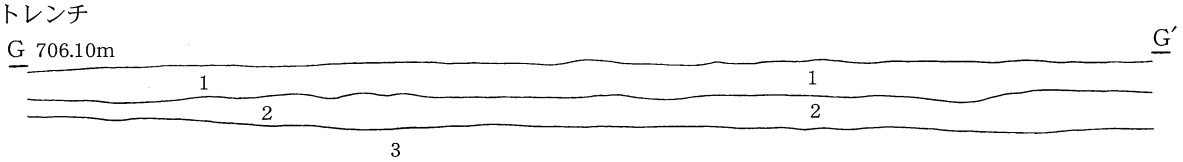
			締り	粘性				締り	粘性
1層	10YR5/2（灰黄褐色）	水田の耕土（Ⅰ層）	強	強	5層	10YR4/1（褐灰色）	シルト（旧水田の）畦及び水路	中	中
2層	10YR4/3（鈍い黄褐色）	耕地整理時の人為的推積土（Ⅱ層）	強	中	6層	10YR3/2（黒褐色）	旧水田層	中	強
3層	10YR4/2（灰黄褐色）	シルト	強	中	7層	10YR5/3（鈍い黄褐色）	ローム及び礫層（Ⅲ層）	強	強
4層	10YR4/3（鈍い黄褐色）	礫層	中	弱					

5トレンチ

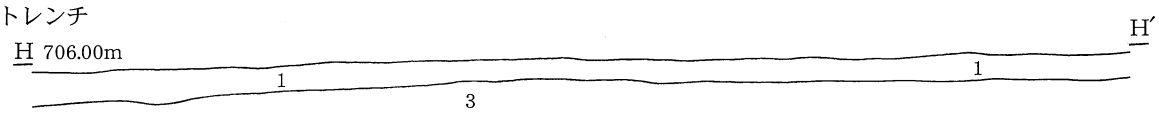


			締り	粘性
1層	10YR4/2（灰黄褐色）	水田の耕土（Ⅰ層）	強	中
2層	7.5YR4/4（褐色）	水田の敷	強	強
3層	7.5YR4/3（褐色）	ローム粒子を10％含む	強	強
4層	7.5YR4/3（褐色）	旧水田耕土	強	強
5層	7.5YR2/2（黒褐色）	遺物包含層	強	強
6層	7.5YR2/3（極暗褐色）	ローム粒子を5％、炭化物を３％含む	強	強
7層	7.5YR2/3（極暗褐色）	径0.1～１cmまでの小礫を10％含む	中	中
8層	7.5YR2/3（極暗褐色）	径１～10cmまでの礫を20％含む	中	弱
9層	7.5YR5/4（鈍い褐色）	漸移層	中	中

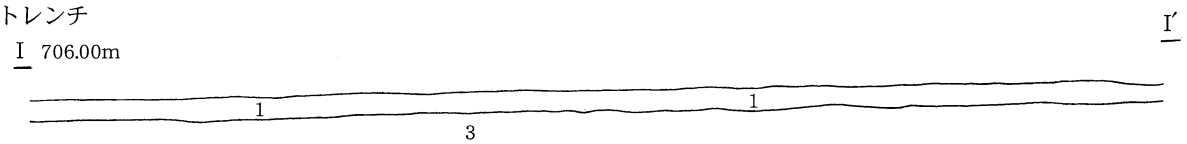
6トレンチ



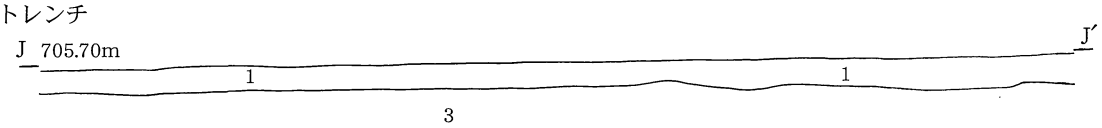
7トレンチ



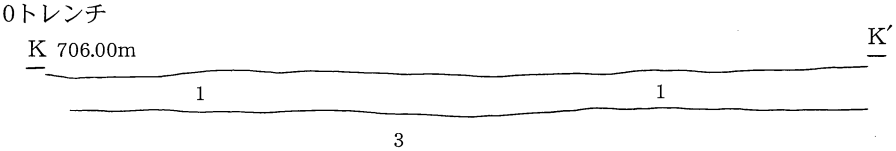
8トレンチ



9トレンチ



10トレンチ



			締り	粘性
1層	10YR4/2（灰黄褐色）	水田の耕土	強	中
2層	10YR3/3（暗褐色）	漸移層	強	強
3層	10YR5/3（鈍い黄褐色）	ローム層（Ⅲ層）	強	強

0　(1：60)　2m

第18図　試掘トレンチ土層断面図

第19図　試掘トレンチ出土土器拓影図

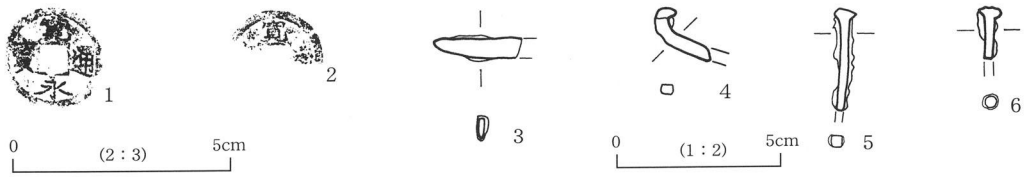
第８表　試掘トレンチ出土土器観察表

（法量cm・g）

番号	出土場所	器種	法量	成形・器形の特徴	文様・調整	備考
1	3トレンチ	深鉢				燃焼…良好 胎土…径02以下の白色砂粒を多く含む 色調…51R4/6(赤褐) 縄文中期　隆帯
2	3トレンチ	深鉢				燃焼…良好 胎土…径02以下の白色砂粒を含む 色調…10R6/3（にぶい黄橙） 縄文中期
3	3トレンチ	深鉢				焼成…良好 胎土…径0.2以下の白色砂粒を含む 色調…10YR6/3（にぶい黄橙） 縄文中期 №２と１固体と思われる
4	3トレンチ	深鉢				焼成…不良 胎土…径0.2以下の白色砂粒を多く含む 色調…7.5YR5/4（にぶい褐） 縄文

第３節　遺構外出土遺物

各調査区の遺構確認作業時において出土した遺物について紹介する。縄文土器、土師器、陶・磁器、黒曜石片等の他、金属器として銭貨「寛永通宝」２点（１・２）、刀子（３）、釘（４～６）が出土している。



第20図　遺構外出土金属器実測図

第９表　遺構外出土金属器観察表

（法量cm・g）

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	銭貨	銅	—	2.3	0.15	2.3	完形	寛永通宝
2	銭貨	銅	—	(2.1)	0.15	(0.76)	一部欠損	寛永通宝
3	刀子	鉄	(5.4)	1.4	0.4	7.0	一部欠損	
4	釘	鉄	(2.7)	0.4	0.3	(1.0)	一部欠損	断面　四角形 鍛打成形　棒状の材を叩いて折り曲げ頭部を作出
5	釘	鉄	(3.1)	0.3	0.3	(1.3)	一部欠損	断面　四角形
6	釘	鉄	(1.6)	0.3	0.3	(0.4)	一部欠損	断面　丸形

第V章　総　　括

1　調査の成果と課題

北田遺跡における発掘調査は、平成３年度に実施した第１次調査に次いで今回で第２次目となる。遺跡は、第１次調査結果と遺跡詳細分布調査結果から、縄文時代中期、平安時代、中・近世に渡る複合遺跡であることが知られていた。遺跡は、戦後の農業基盤整備事業により、多くが消滅してしまっていたが、かろうじて部分的に遺構が残されていたことは幸いであった。

今回の調査結果で古代の集落発生が奈良時代にまで遡ることが判った。また、新たに中・近世における遺構の検出に至ったことは、地域の集落構成の歴史を究明する上で貴重な発見であったと言えよう。

特に中世期の遺構は、室町時代後期から戦国時代の竪穴建物址と、「V」字に掘り込まれる「堀切り」の特徴を持つ溝状遺構の存在が明らかとなった背景には、遺跡の北東の台地に築かれた県史跡「上ノ平城址」との関わりが考えられる。城址は、古くは平安時代末期から鎌倉時代にかけて構築された県内でも数少ない古式な城として知られ、その後は廃城となったとされていたがが、平成10～12年にかけて行われた城址の内容確認の試掘調査では、戦国時代（15世紀中頃～16世紀中頃）にかけて機能した城であったことが判っている。両遺構は、城が機能していた時期とほぼ同時期のものであることから、城を拠点とした集落域の広がりが調査地一帯にまで及んでいたことになる。しかし、近世以降になると、遺跡の名のとおり一帯は「北田」とよばれ、稲作を中心とした耕作地へと変貌を遂げることになる。現在も地域一帯に残る小字名からも、古くから町並みが造設されていたことが伺えるが、少なくとも近世にはその成立していたのであろうが、その起源と発生の因果関係には城址が機能していた戦国時代にまで遡ることを示唆したい。

2　おわりに

末筆となりましたが、今回の調査の成果がこれからの郷土の歴史解明の一助となり、また多くの人に文化財保護に関心を抱いていただければ幸いに存じます。今回の調査の進行と本書の作成にあたり、深いご理解とご協力をいただきました社会福祉法人平成会を始め、地元南小河内区と地域住民の方々、そして発掘調査関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

参考引用文献　（著者名50音順）

安城市歴史博物館　1996「愛知県の中世陶器　渥美・常滑・瀬戸」

上伊那郡誌編纂会　1965「上伊那郡誌」第２巻　歴史編

国立歴史民俗博物館　1998「陶磁器の文化史」

小泉　弘　1990「江戸を掘る」柏書房

信濃史料刊行会　1974「「新編　信濃史料叢書」　第７巻

瀬戸市史編纂委員会　1969「瀬戸市史　陶磁史篇１」

瀬戸市史編纂委員会　1993「瀬戸市史　陶磁史篇４」

辰野町教育委員会　1995「堀の内居館跡』

帝京大学山梨文化財研究所　1990『シンポジウム　考古学と中世史研究－中世考古学及び隣接諸学から』

長野県教育委員会　1983「長野県の中世城館跡－分布調査報告書－」

長野県史刊行会　1988「長野県史」考古資料編　全１巻（１）遺跡地名表

長野県史刊行会　1988「長野県史」考古資料編　全１巻（２）中・南信版

長野県史刊行会　1988「長野県史」考古資料編　全１巻（３）遺構・遺物

箕輪町教育委員会　1989「普済寺遺跡」

箕輪町教育委員会　1990「大垣外遺跡」

箕輪町教育委員会　1992「郷沢遺跡」

箕輪町教育委員会　1993「北田遺跡」

箕輪町教育委員会　1993「大垣外遺跡」第２次

箕輪町教育委員会　1994「大垣外遺跡」第３次

箕輪町教育委員会　1997「箕輪町遺跡詳細分布調査報告書」

箕輪町教育委員会　1999「上ノ平城跡」－平成10年度第１次試掘調査調査概報－

箕輪町教育委員会　2001「上ノ平城跡」

箕輪町教育委員会　2001「荒城遺跡」

箕輪町誌編纂委員会　1976「箕輪町誌」　第１巻　自然編現代編

箕輪町誌編纂委員会　1986「箕輪町誌」　第２巻　歴史編

図　　版

8－1

8－2

8－3

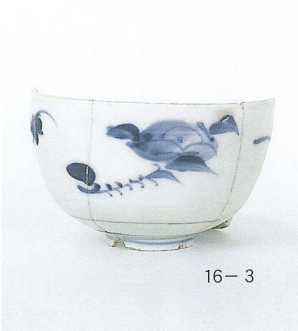
8－5　8－6

8－4

16－1

16－2

16－4


16－3

16－5

1号住居址出土土器・1号竪穴状遺構出土土器類

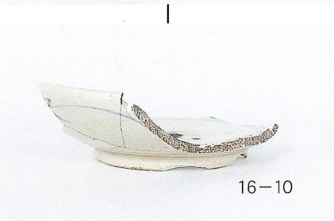
16－7

16－6

16－9

16－16

16－17



16－10

16－11

16－19

16－8

16－12

16－13

16－14

16－18

16－15

1号竪穴状遺構出土土器類

1号竪穴建物址出土土器類

トレンチ出土土器

出土石器

20－4
15－2
15－4
12－4
12－11
12－8
12－5
12－2
12－3
12－12
12－1
12－13
12－7
12－6
12－10
20－6
15－3
20－5
12－9
12－15
12－14
20－3

出土鉄器

20－1
20－2
15－1

出土銭貨・煙管

報告書抄録

ふりがな	きただいせき
書名	北田遺跡
副書名	平成16・17年度介護老人保健施設「わかな」及び認知症対応型共同生活介護「わかな」建設工事に伴う埋蔵文化財第２次緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
著者名	赤松　茂・根橋とし子
編集機関	箕輪町教育委員会
所在地	〒399-4601 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地　㈹TEL0265-79-3111
発行年月日	2006年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きただいせき 北田遺跡	ながのけんかみいなぐん 長野県上伊那郡 みのわまちおおあざひがしみの 箕輪町大字東箕 わ 輪3,296番地1他		109	35° 56′ 00″	137° 59′ 51″	2004.6.7 ～ 2004.12.7	15,794㎡	老人福祉施設建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北田遺跡	集落址	縄文時代 奈良時代 中・近世	竪穴住居址　１軒 土坑　４基 竪穴建物址　１軒 溝状遺構　１条 竪穴状遺構　１基	縄文土器、土師器、須恵器、陶・磁器 金属器、石器	今回の調査により、左記各時代の集落遺跡であることが判った。

北　田　遺　跡

平成16・17年度介護老人保健施設「わかな」及び認知症対応型共同生活介護「わかな」建設工事に伴う埋蔵文化財第２次緊急発掘調査報告書

平成18年３月 発 行

編集・発行　社会福祉法人　平　成　会
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地
箕 輪 町 教 育 委 員 会

印　　刷　龍 共 印 刷 株 式 会 社